

構築会
たより

2007

■ 会長挨拶

03

谷口 康彦 (A70)

■ 部門たより

04

社会基盤工学部門／中辻 啓二 (C69)

建築工学部門／横田 隆司 (A83)

■ 構築工学科創設60周年記念特集「この10年を振り返る」

06

翔け、企業も技術者も世界へ向けて —建設技術者のステータスアップへ—／杉 晟 (C65)

建築この10年あまりと大阪大学／橋 英三郎 (A66)

国立大学の学長としての貴重な経験／崎元 達郎 (C67)

最近の建設業界について／友廣 康二 (C71)

大学院重点化から10年／出口 一郎 (C71)

厳しさの次に生まれるもの／大村 鐵太郎 (A71)

「官」から見たこの10年と今後の展望／橋本 彰 (A72)

大学の変化—私が見た独法化と国際化／森田 孝夫 (A72)

この10年を振り返る／福田 保 (C73)

「耐震設計技術」の果たすべき役割とその限界／福本早苗 (A73)

この10年間における公共事業に吹き荒れる嵐の中で／山口 嘉一 (C84)

都市再生から見た、この10年／田中 伸和 (A86)

■ 名誉教授の先生からのおたより

22

沿岸環境研究会を閉じて／榎木 亨

大阪の温泉 — これからの地下水の利用と保全／村岡 浩爾

酷暑お見舞い申し上げます！／森 康男

(また²) どうでも良い近況／舟橋 國男

建設産業界における人材育成について／松井 保

「進化」とは、何でしょう／柏原 士郎

ローマ字には気をつけて／橋 英三郎

■ 名誉教授の先生からの一言メッセージ

29

鈴木 計夫

松井 保

脇山 広三

■ 卒業生たより

30

- 卒業50年 卒業して50年／岩本 樹雄 (C57)
卒業50年 卒業50年 四方八方話（よもやまばなし）／秦 洋一郎 (A57)
卒業40年 ライフワークは、古事記の研究／芦田 大藏 (C67)
卒業40年 「PDCAで始まり、PDCAで終えたサラリーマン人生40年」／前田 孝男 (A67)
卒業30年 マイコンからパーソナルな30年／蓮輪 賢治 (C77)
卒業30年『卒業約30年』 73会 全国大会／高井 正行 (A77)
卒業20年 本州最南端の町から／太田 和良 (C87)
卒業20年 気がつけば卒業20年目。そして、これから／芦田 智之 (A87)
卒業10年 子の誕生に改めて思うこと／入江 政安 (C97)
卒業10年 愛校心のようなもの／西岡 絵美子 (A97)

■ 学生からのたより

42

- 31歳のモラトリアム／谷内 久美子
近頃の等身大の阪大留学生／李 華
ターニングポイント／小山 恵子
日々の生活について／本村 信一郎
卒業旅行／山本 愛
一期一会／羽原 健雄
大学生活について／岩本 卓麻
3回生の悩み／田野 司也
おざなりなおざなり／來田 成弘
現実と夢幻に生きる或る大学生の肖像／岡田 博徳
3セメスターを振り返って／中井 千尋

■ 2007年度構築会役員会報告

51

■ 構築会役員一覧

54

■ 支部役員一覧

55

■ 支部たより

56

大阪支部

愛知支部

東京支部

兵庫支部

広島支部

■ 構築会会則

61

■ 会員動静

63

■ 教室たより

83

■ 事務局たより

86

■ 業界案内

87

ごあいさつ



構築会会長
谷口 康彦 (A70)

構築会の皆様におかれましては、ますますのご活躍こととお喜び申し上げます。

このたび構築会総会において会長に就任させていただきました。この一年間、皆様方のご協力のもと、構築会の発展に努めて参りたいと考えています。どうかよろしく御願いいたします。

私は、昨年まで都市再生機構に勤務し、現在（株）UR サポートにおいて、関西地域のまちづくり業務に従事しております。このたび、2007年度の構築会よりをお送りさせていただくにあたり、一言、ご挨拶を申し上げます。

今年度は、大阪大学工学部構築学科が創設され、60年目の記念すべき年度にあたります。母校におかれましては、2008年1月に、記念行事を予定されております。構築会では、これに共催し、50周年以降の「この10年を振り返る」をテーマに、「構築会たより」の特集を企画いたしました。

この10年間は、学科創設以来の60年の期間の中でも、特に際だった大きな社会変化、変節点の時代であったと思います。バブル崩壊、住専問題など金融機関の破綻に端を発し、数多くの負の遺産の解消が求められた時代であると同時に、今後我が国が初めて直面する人口減少、さらには約50年先には65歳以上の高齢者が現在の2倍にまで上昇すると予想される高齢化社会に対応すべく、公共団体・企業はじめ様々な分野で、改革と体质改善が求められてきた時代でもあります。

そしてすでに、我が国の人口は2005年にはじめて減少し、今後一貫して減少基調をとなることが見込まれ、改革が現在進行形で進められております。

国や公的部門では、「官から民へ」「国から地方へ」をスローガンに、行政のスリム化と規制緩和が進められてきました。私が勤務していました都市再生機構もこの時期、1999年には都市基盤整備公団に変わると共に、2004年にはさらに独立行政法人都市再生機構に組織変革がなされました。道路公団においても民営化がなされました。

また、地方公共団体では、税源移譲、地方交付税、補助金の三位一体の改革が進められる同時に、市町村合併が大きく進み平成11年3月には約3,200あった市町村は、現在、約1,800に統合されました。現在においても第三セクターはじめとする行財政改革が主要課題となっています。

国立大学も、平成16年に独立行政法人に変わり、大学の個性化とともに経営戦略が求められてきています。

企業・民間分野では、国際的競争力の強化が求められるなか、数多くの企業再生・企業再編とともに企業創出も起きております。

地域・まちづくりの分野では、旧来の拡散型都市構造から集約型都市構造への転換とともに、一層の財政的制約が高まるなかで、より効率的、効果的なまちづくりが求められ、地域の個性を活かした様々な都市再生・地域再生の取り組みが生まれてきています。

この10年は、産、官、学いずれもこのような大きな変革を迫られた時代です。「構築会たより」では、各界の中心で活躍されている方々に、この10年の変化を振り返っていただくとともに、今後の土木・建築界がどのような方向に向かうのかを展望して頂いています。

構築会は、現在、正会員約4,200名 総会員数が約4,600名に上ります。また、土木・建築が同一の同窓会として存する、全国的にもまれな会であると思います。この特徴を最大限活かし、相互の交流を通して、新たな時代を切り開いていく一助になることが出来れば幸いと考えています。

最後になりましたが、構築会会員の皆様方のご多幸とご健勝をお祈りしてご挨拶とさせていただきます。

2007年は「阪大構築工学創設60周年」の記念すべき年に当たります。晴れやかに華々しく催された50周年記念行事から既に10年経過しました。この10年間に日本社会は大きく変貌し、大学も大学院重点化や国立大学法人化が進められ10年前に予想した大学の姿とは大きく異なっています。先輩たちに「大学はどうなっているのか」とよく言われます。急激に変化したために前後の出来事が絡み合って、大学人でさえ説明できない状況です。地球総合工学・社会基盤工学から昔の土木工学科を想像することは無理な要請でしょう。この十年間の大学の変革を正確に記録として残すことでも十年綴りの記念事業の重要な役割でしょう。続く十年、次の十年が経過して100周年になりますと、この十年がどのように位置づけられているのか楽しみです。記念祝賀会は次の要領で開催します。一緒に還暦のお祝いを致しましょう。

阪大構築工学科創設60周年記念祝賀会

日時：平成19年1月26日（土）午後4:30～

場所：千里阪急ホテル／千寿の間

さて、恒例に倣い社会基盤工学の近況を報告します。本年4月1日施行の学校教育法の一部改正により「助教授」が廃止され「准教授」が置かれることになりました。両者は全く異なる職階であり、前者の職務は「教授の職務を助ける」のに対して、後者は優れた知識、能力および実績を有するものであって、職務は「学生を教授し、その研究を指導し、研究に従事する」とされています。

一昨年の大学院改組で社会基盤に合流された地球総合工学専攻の谷本親伯教授が本年3月に定年退職され、名誉教授の称号を授与されました。向う2年間阪大力リフォルニア文化センターの所長として引き続き勤務

□ 社会基盤工学部門の近況



社会基盤工学部門長
中辻 啓二 (C69)

されます。前年度の「近況報告」で奈良敬教授が紹介された若手人材交流2件も始動し始めました。東工大、名大と阪大の大学院工学系人材相互交流プログラムで、小野潔君が4月1日から3年の予定で東工大土木の准教授として勤務されています。今ひとつは「グローバル若手研究者フロンティア研究拠点」です。今年度採用された5名のなかに土木・建設系として貝戸清之氏（東大D2000年卒）が着任されています。このように学内外で人事が動き出すと、風通しが良くなり、小田和広学内講師と荒木進歩講師が准教授に昇進し、三好崇夫君が助教に採用されました。教授不在となった地球保全総合工学領域に中辻啓二教授が7月16日付けて移り、地球環境保全工学領域と名称変更して7番目の研究領域になりました。当面は地球環境に係わる研究を進めていく予定ですが、この研究領域をどのように展開するかが、阪大土木の戦略の要となるでしょう。

学生の進学進路です。初めての試みの大学院・推薦入学制度は全国的規模の周知が徹底せず、学外1名・学内6名を採用する結果となりました。推薦も含めて学外からの4名を含む36名が修士課程に進みます。学生数は学部45名、大学院34名です。今年度の就職の特徴は、国家公務員3名、地方公務員3名、大手建設7名、コンサル2名、そして前公団・都市インフラ10名です。就職の分布は昨年度と比べて大幅に変わりました。就職を大学が制御できなくなったとはいえ、毎年毎年分布の傾向が変わったのでは堪りません。長期展望で看たい教員と短期の変動を想像し勝ちな学生との意識の差が現れています。根底には談合、3K、単身赴任等に由来する土木離れが目立ちます。因みに国家公務員の2名は経済産業省希望です。学生諸君が土木を魅力的な職場であると思えるよう、卒業生の諸兄に協力をお願い申し上げます。

今 年度は建築工学部門の相良和伸教授が地球総合工学専攻長に選出され、その下で新米教授ながら建築工学部門長という責任ある役目を仰せつかっております。大学の動きとしては、今年4月より教授・准教授制が導入され、助教授が「准教授」に、助手が「助教」という耳慣れない名称に変更されました。また、鷲田清一先生が文系初の大蔵大学総長に8月より就任され、10月には大阪外国語大学と統合というように、大阪大学も理系主体から文系充実に変わりつつあるようです。建築工学部門としても、この波に乗り遅れないようしたいものだと思っています。

さ て、この1年間の教職員の異動についてご報告申し上げます。今井克彦教授が今年3月末で定年退職され、退職記念事業の一環として5月26日に記念パーティが千里阪急ホテルにて開催されました。また、吉村英祐助教授が4月より大阪工業大学へ教授として

栄転されています。両先生の長年にわたるご功労に感謝申し上げます。昇任人事としては、6月に多田元英准教授が第1領域の教授に、7月に第5領域の飯田匡助教が講師にそれぞれ昇任されています。安福健祐氏が4月に第7領域の助教として採用されました。先生方の今後の活躍を期待したいと思います。さらに、第8領域の名称が「建築構法デザイン学領域」から「建築・都市環境デザイン学領域」に変更されて、第4領域の相良教授が7月に第8領域へ所属換になっています。専攻事務室には宮下勝裕氏が事務補佐員として5月より勤務いただいております。

うれしいご報告は、上記の吉村先生と多田先生が今年度の日本建築学会賞を受賞されることです。両先生の日ごろの研究業績の賜物とお喜び申し上げます。

次 に学生の動向についてご報告申し上げます。現在、2年生以上の建築工学部門の学生は学部生を含め

□ 建築工学部門の近況

て総数235名（留学生21名を含む）で、なかでも女子学生が79名と多くなってきており、女子トイレの充実など男子学生が大半であった時代では許されていた劣悪な研究・教育環境の整備が求められています。就職活動につきましては、昨今の景気上昇に伴ってか、ここ数年、順調に推移しており、今年度も公務員受験中など数名を除いてほぼ内々定をいただいている状況で、これも諸先輩方のご尽力の賜物と感謝申し上げます。ただ、年々就職活動の開始時期が早くなっています。2学期の授業に支障を来たすようになってきております。学生の本分は勉強にあることをご理解の上、勉学に支障のない採用活動をお願いする次第です。

なお今年、構築工学科創設60周年を迎えるに当たっては、社会基盤工学部門と共同で記念事業を行う準備をしております。とくに年明け1月26日（土）に千里阪急ホテルで記念祝賀会を開催いたしますので、多数の先輩の方の参加をお願いしたいと存じます。

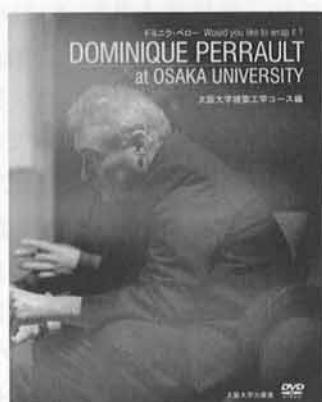
さ て、今年度末には第2領域の大野義照教授と第6領域の甲津功夫教授が定年退職されます。両先生のご退職により教授陣は数年前の陣容から総入れ



建築工学部門長
横田 隆司 (A83)

替えになります。大学を取り巻く状況がますます厳しくなる一方の中で、先輩教授の先生方が長年積み重ねられてきた伝統をどう受け継ぐのか心配な面がなきにしもあらずですが、教職員一同、協力してがんばっていきたいと思っております。今後とも皆様方のご声援よろしくお願い申し上げる次第です。

最 後になりますが、昨年の構築会だよりで奥先生（前年度部門長）が紹介されておりますドミニク・ペロー氏によるワークショップと講演会の内容を本として今年3月に出版しました。少数部数印刷のため書店では既に手に入りにくいかと存じますが、部門には若干残部がございますので、購入ご希望の方はお申し込みください。



翔け、企業も技術者も世界へ向けて —建設技術者のステータスアップへ—

最近の日本経済は上場企業の経常利益が連続 5 年間増加しており、来年 3 月期も増収と予測されているが、我々建設産業に携わる者には全く実感がない。即ち明るい話題が皆無と言っても過言ではない状況が続いている。激変の約 10 年を振り返って、今後を展望することなど評論家ならいくらでも可能と思うが、職員や協力会社など多くの関係者の生活をどうして守るかを日々考えている者にとっては、大変な時代になったと言うのが実感である。種々思うことはあるものの、文章で綴るよりいくつかの表を見て建設産業の一端を理解して頂き、それにコメントを付け、私の一考察とさせていただきたい。

表①・②は、建設投資の推移と建設業許可業者数の推移を示しているが、過剰供給構造がよく分かる。表③は、大手と言われる日本建設業団体連合会加盟 54 社の表①のマーケットに対するシェアを示すとともに 54 社の中でスーパーと呼ばれる 5 社とそれ以外の 49 社のシェアの推移が明確にわかる。表④は、過剰供給構造を各社のリストラ（人員削減）で補ってきたことを示し、またそれは良否は別として終身雇用制度を壊さざるを得なかつたことに繋がっている。

改正独禁法施行（2006.1）後の公共工事入札の混乱（低価格入札）、いわゆる各社生き残りを賭けた戦国時代突入は、以前から競争の激しい民間市場にも拍車をかけ、官・民共にコスト競争でなく、プライス競争、即ち安ければ良いという流れができた。その結果として、表⑤の大手 25 社の本業の利益を示す営業利益率低下の推移から見て、まだまだ生き残りへの体力勝負が不可欠と窺がえる。最近、国会議員、国土交通省等は、日本の基幹産業である建設業の健全な発展の観点から技術力重視の施策の方向性を示した。それによ



佐藤工業株式会社
社長
杉 晟 (C65)

ると技術を売る会社として、会社の規模に拘わらずアイデア次第で勝負が決まる時代になりそうであり、海外工事に従事してきた小生の経験からもこれらの施策に期待している。

建設業は他産業と比べて、就業者は高齢化が進み、労働賃金は安く、労働時間が長い。その結果、表⑥に示すように労働生産性が上がらずに下がっている。受注産業=請け負け、から脱却するためには発注者の理解が欠かせないと、生産システムの中で I T 技術、元・下請の役割の明確化や職員交代制度（技術者の弾力的な異動）などを取り入れる工夫が求められる。

わが国の建設産業はボーダレス社会の中でグローバリゼーションの遅れている業種である。表⑦は、その一端を示している。もっと外に向けて大きく飛翔するマネジメント力が問われている。マーケットは東南アジアに限ってみても各種インフラ以外にもエネルギー資源確保や地球温暖化問題の解決等まだ十分にある。わが国は資源のない国、食料自給率約 40% の国であるが豊富な人材がある。国内規模は小さくとも海外での貢献度が高い会社もある。日本において建設産業は不可欠であり、海外、特に発展途上国への投資はこれから増えていくことを考え合わせれば、まだまだ日本の建設産業は発展の余地があり、技術者の活躍の場はある。

日本の文化を大切にし、経営の知識を持ち、国内に限らず海外のインフラ整備や環境問題にも対応できる人材を早く多く育てた会社、即ちボーダレス社会への変化に対応できる技術と経営に優れた会社を作り上げるのがマネジメントの最大の責務であり、建設技術者のステータスアップに繋がっていくと考えている。

表① 建設投資の推移（年度）【出典—（財）建設経済研究所 2007.4.24 公表】 (単位：億円、実質値は2000年度価格)

	90年度	95年度	00年度	01年度	02年度	03年度	04年度 (実績見込み)	05年度 (見込み)	06年度 (見通し)	07年度 (見通し)
名目建設投資 (対前年度伸び率)	814,395 11.4%	790,169 0.3%	661,948 -3.4%	612,875 -7.4%	568,401 -7.3%	537,069 -5.5%	525,300 -2.2%	534,600 1.8%	536,600 0.4%	532,800 -0.7%
名目政府建設投資 (対前年度伸び率)	257,480 6.0%	351,986 5.8%	299,601 -6.2%	281,931 -5.9%	259,174 -8.1%	234,697 -9.4%	205,200 -12.6%	198,800 -3.1%	186,900 -6.0%	176,200 -5.7%
名目民間住宅投資 (対前年度伸び率)	257,217 9.3%	243,129 -5.2%	202,756 -2.2%	185,751 -8.4%	179,507 -3.4%	179,008 -0.3%	183,700 2.6%	186,000 1.3%	193,400 4.0%	196,000 1.3%
名目民間非住宅建設投資 (対前年度伸び率)	299,698 18.4%	195,053 -1.8%	159,591 0.7%	145,193 -0.9%	129,720 -10.7%	123,363 -4.9%	136,300 10.5%	149,800 9.9%	156,300 4.3%	160,600 2.8%
実質建設投資 (対前年度伸び率)	840,446 7.6%	777,268 0.2%	661,947 -3.6%	623,579 -5.8%	584,051 -6.3%	548,316 -6.1%	530,300 -3.3%	533,600 0.6%	525,700 -1.5%	515,900 -1.9%

※05年度まで国土交通省「平成18年度建設投資見通し」による ※民間非住宅建設投資＝民間非住宅建築投資+民間土木投資

表② 建設業許可業者数推移 【出典—建設業ハンドブック2007、国土交通省】 (単位：万社、各年3月末)

	90年	95年	00年	01年	02年	03年	04年	05年	06年	07年
建設業許可業者数	50.9	55.2	60.1	58.6	57.1	55.2	55.9	56.3	54.2	52.4

表③ 建設投資の推移と日建連会員受注実績 比較

【出典—日建連会員受注額：日本建設業団体連合会 2007.5.1 公表、大手5社受注額：決算短信】 (単位：億円)

	名目建設投資	日建連会員受注額	シェア	日建連会員受注額	大手5社受注額	シェア	49社受注額	シェア
95年度	790,169	189,278	24.0%	189,278	64,517	34.1%	124,761	65.9%
00年度	661,948	140,235	21.2%	140,235	53,996	38.5%	86,239	61.5%
01年度	612,875	128,843	21.0%	128,843	51,251	39.8%	77,592	60.2%
02年度	568,401	118,124	20.8%	118,124	49,546	41.9%	68,578	58.1%
03年度	537,069	119,393	22.2%	119,393	51,358	43.0%	68,035	57.0%
04年度	525,300	129,017	24.6%	129,017	56,836	44.1%	72,181	55.9%
05年度（見込み）	534,600	125,581	23.5%	125,581	55,909	44.5%	69,672	55.5%
06年度（見通し）	536,600	124,794	23.3%	124,794	57,435	46.0%	67,359	54.0%
95年度から2006年の増減率	△32.1%	△34.1%		△34.1%	△11%		△46%	

※①調査対象 日建連法人会員 54社 ②海外工事は含まず

表④ 大手建設会社の従業者数の推移 【出典—建設業ハンドブック2007】(単位：千人)・・・・35社の従業者（役員含む）

	95年	00年	01年	02年	03年	04年	05年
従業者数	186.3	151.9	144.0	134.9	122.2	114.3	111.2

表⑤ 大手25社の年度別営業利益率の推移 【出典—決算短信】 (単位：%)

	04年度	05年度	06年度	07年度
営業利益率	2.8	2.8	2.2	2.2

表⑥ 建設業と製造業、全産業の労働生産性推移 【出典—建設業ハンドブック2007】 (単位：円／人・時間)

	90年度	95年度	00年度	01年度	02年度	03年度	04年度	05年度
建設業	3,787			漸減				2,790
製造業	3,234	】			増			5,235
全産業	3,284	】		漸増				4,500

(注) 労働生産性=実質粗付加価値額(2000年価格) / (就業者数×年間総労働時間数)

表⑦ 世界の大手建設企業の海外売上高比率 【出典—建設業ハンドブック2007】 (単位：百万ドル)

海外売上高比率 =海外売上高／総売上高	欧米大手5社		日本大手5社	
	52,361 / 93,175 = 56.2%		7,052 / 60,155 = 11.7%	

建築この10年あまりと大阪大学



大阪大学名誉教授
橋 英三郎 (A66)

「昨日どうしてたの?」「そんな昔は憶えていない。」映画「カサブランカ」でのボギーのせりふ。退職時に大学関連の書類は全て処分し、現在、3つのプロジェクトに追われて苦戦中の私にとって、建築この10年の記憶は急速に薄れつつあります。地球系(船舶海洋・社会基盤・建築)の初代専攻長(平成16年度)だったから何か書けとのこと。ボギーのせりふを言い損ね、期限も迫りましたので、あやしげな記憶を少し辿ってみます。

阪大にとっての出来事は「国立大学」でなくなり「国立大学法人」になったことです。予算は削減され、削減分は外部資金を導入すべしとなりました。このいやおう無しの変革の助走段階では、鈴木計夫教授(現名誉教授)、舟橋教授(現名誉教授)が阪大の評議員として重責を務められました。昔、商都であった土地柄もあってか、阪大の現在の財務収支は旧七帝大中ではなかなか良いようです。江戸の人口の約50万人が武士であったのに対し、大阪は約1000人程度? しかいなかつたそうです。その少ない武士もそろばんを持って走っているのは実に嘆かわしい、と目付役が幕府に手紙を書き送っているので、そのDNAが今も大阪の風土に溶け込んでいるのかも知れません。

又、この期間に退官された脇山教授(現名誉教授)はボルト接合の、井上豊教授(現名誉教授・日本建築総合試験所・試験研究センター長)は耐震構造の、それぞれ重鎮として現在も活躍されています。阪大サイバーメディアセンターの設立にあたって、吉田教授(現名誉教授、元日本図学会会長)のセンターへの移籍で設立の条件が整ったといういきさつがありました。今度、副学長になられた西尾教授(電気、情報、通信系)は当時のセンター設立の中心的な役割を担っておられた

ので、西尾副学長も吉田先生だけには頭が上らないのではなどと勝手に思ったりしています。なお吉田先生が退官された後は、阿部教授に引き継がれております。私が専攻長のとき、鷺田教授(現阪大総長)から新しい部門の立ち上げで建築から1名の移籍をお願いしたい、との申し出がありました。しかし結局その話は流れました。そのときの話しの中で鷺田先生はフランス哲学(特にパスカル)を専門にしていたと伺いました。私は映画好きで映画関連書籍もよく読みますが、ある本に鷺田先生の好きな映画は「アラビヤのローレンス」とあり阪大にも映画通の仲間がいるのだなーと以前より名前だけは知っていました。

ところで、建築の大学院の正式名は「大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻建築工学部門」と落語の「寿限無」ほどではないにせよ長い名前となっています。漢字の多さは胸一杯に勲章を飾るどこかの国の将軍のような感もうけます。かろうじて「建築」の名前が残ったのは阪大の竹村健一?こと論客の柏原教授(現名誉教授、武庫川女子大教授)のおかげです。

さて、現在、吹田キャンパスの建物の老朽化にともなう改修工事がスタートしています。全体計画は、木多准教授(助教授が准教授に変名された)が中心となり我儘な学者連中の説得・調整に奔走しており、既存建物の耐震診断には大野教授(元建築学会近畿支部長)、岸本准教授らが、工学部高層棟の新設については甲津教授(元京大助教授、元大阪工大教授)らが参画されました。ちなみに曲がりなりにも私が無事退職できたのは甲津先生の的確なアドバイスがあったおかげです。故紙野教授による新キャンパス計画の「紙野案」は文科省からの予算縮小で既存建物の改修にとどまったのは残念です。今井教授は本年退職され

ましたが、在職中は土日返上で八面六臂の活躍をされ、勤務時間の長さは学内随一だったと思いますし、豊中キャンパスの耐震改修などで多くの貢献をされました。台湾の集集地震、新潟県の中越地震、中越沖地震の被害調査では阪大の腕章をつけての馬場准教授のすばやい対応が光っています。現在、Eディフェンスを用いた実大振動実験に参画されている多田教授は、学協会からの熱い期待にきっと近い内に応えられることでしょう。明石花火大会歩道橋事件の原因究明に取り組まれた吉村助教授（現大阪工大教授）の研究は高い評価を受けております。柏原名誉教授、横田教授をはじめ旧5講座のグループは地震防災やニュータウン再生、数々の出版活動などで「地域に生き」日本で羽ばたいています。この分野は「世界ではばたく必要はない」とは柏原先生の持論でした。都市空間での「居場所」論を展開されている鈴木毅准教授、都市計画の舵取りをされている小浦准教授らも着実に成果をあげられています。相良教授（元三重大学教授）、山中准教授、甲谷講師らのグループは阪大風洞実験施設の運営や、自然換気を実際の超高層ビルで実現するなどエネルギー環境問題に取り組まれています。昨年、奥教授を中心に計画系教員が企画されたフランスの建築家ドミニク・ペロー氏によるワークショップと講演会は参加した阪大および関西の他大学の学生にとってインパクトがあったことと思います。安藤忠雄さんを凌ぐ人材が生まれることを祈ります。コンクリートの調合名人である「いぶし銀」のような中川助教（助手が助教に変名された）の功績も大です。若手の飯田講師、松原助教、安福助教、向出助教、瀧野助教らは10年後には間違いなく日本の建築界の中核となっていることでしょう。この10年間あまりの間に転出された井上一朗助教授（現京都大学教授）、佐藤助教授、中塚助教授（ともに現大阪工大教授）、桑原学内講師、阪田助手（ともに現京都工大准教授）の阪大在職における教育・研究面での多大な貢献も決して忘れてはならないことだと思いますし、現在その薰陶をえた卒業生が社会で生き生きと

活躍されています。又、この10年間あまりの建築教室の活動を「黙って」支えてこられた技官の方、事務官の方、事務補佐員の方々の果たされた役割の重さについては今更言うまでもありません。お祭り騒ぎの好きな私は、この10年間で5回、国際会議を阪大で開催しました。巻き込まれた向井講師（現奈良女子大准教授）や古川学内講師（現名古屋大学准教授）は、さぞかし、はた迷惑だっただろうと思います。当方は相変わらずバタバタしていますが、それにつけても、JSSCの大坂オリンピック支援特別委員会（委員長：渡邊英一元京大土木教授、副委員長：橋）の会合に遅刻したとき「君、忙しいんだね」「えーまー・・・」「ところで何がいったい忙しいんだい？」といったらっぽく笑われた土木の故前田幸雄名誉教授の顔がなぜか浮かんできます。

ここ10年あまりの断片的な事項を思い出すまま書き連ねました。学・協会などの諸先生の活躍は紙面の都合で少し抑えぎみにして阪大との関連を中心におかせてもらいました。ところどころ大きな勘違いもあると思いますが、脳の劣化はなはだしく馬鹿のみ重ねつつある者にどうかご寛容のほどを。

国立大学の学長としての貴重な経験

「この10年を振り返る」とのことですが、国立大学の法人化という、約60年前の学制改革以来の大学の大変革について、貴重な経験をしたので、国立大学の現状の一端を報告し、御理解を得たいと思います。

小生は、波田先生、小松先生の御指導のもと、昭和47年に博士課程を単位修得退学後、1年助手を勤めて後、昭和48年に講師として熊本大学に赴任し、35年目を迎えます。熊本大学で、教員、研究者として停年を迎える予定が大きく変わったのが、平成14年11月の学長選でした。同年4月に工学部長になって間もなかったので、学長就任は、晴天の霹靂以上のものでした。

就任時は、ほぼ国立大学が法人化されることが決まっており、各大学は国会の法律審議を横目に、必死で学内の制度設計を急ぎました。法人化の骨子は以下の様です。

- 1) 国（文部科学省）から独立した法人とし、教職員は、国家公務員から非公務員となる。ベンチャー企業等の役員を兼業できたり、争議権も付与される。
- 2) 教学の長、理事長を兼ねる頂点として学長を置き、権限を集中すると共に、大学の裁量と責任を拡大。
- 3) 経営協議会、学長選考会議に学外者を半数以上参加させ、国民や社会に対する説明責任や社会の多様な知恵の積極的活用を重視した社会に開かれた大学とする。
- 4) 文部大臣が定める6年間の中期目標に基づく中期計画を大学が策定、公表し、計画終了時（平成21年度）までに第三者委員会の評価を受け、評価結果が次期の資源配分（予算等）に反映されるPDCAサイクル。
- 5) 予算は、国からの渡し切りの補助金としての運営費交付金、授業料、病院収入、外部からの資金で構成されるが、使途は限定されず、年度を越えての執行も可能。



熊本大学長
崎 元 達 郎 (C67)

法人化後、3年半を迎えますが、各大学は、機能的・戦略的な大学運営により、教育研究の高度化、個性豊かな大学づくり、国際競争力のある大学づくりに懸命に努力しています。問題は、法人化とともに運営の効率化が課せられ、国からの運営費交付金が毎年一定の額が削減（一般管理費の毎年1%減と附属病院の経営改善による毎年2%減）されていることです。運営費交付金は、教職員人件費、光熱水費、施設維持費を大部分の使途とする基盤的経費であります。

これまで、削減に対して、教職員の欠員補充の抑制や様々な経費削減に努めて来ましたが、もはや、教育の質の維持や病院経営において限界に近い状態にあります。このまま削減が継続されれば、国際競争力どころか、特に地方の国立大学は機能不全に陥り、国立大学が果たしてきた我が国の高等教育、将来の人材養成という使命の遂行に重大な障害をきたすことが自明であります。

諸外国では、人材養成こそが国力の源泉であると考えて、何よりも優先して、高等教育への公財政支出の増強を図っています。このような国際環境の中、我が国の力強い成長と国際競争力を確保するために、自然資源や国土の乏しい我が国が今、成すべきは、運営費交付金の削減ではなくて、高等教育への公財政支出（GDP比0.5%）を欧米並みにGDP比1.0%以上に増額、または、近づける努力をすることです。国の財政の健全化という大命題の中にあっても、国が、高等教育または国立大学への投資を怠れば、そのツケは必ず国民や企業に及びます。同窓の皆様には、企業の方が多いと思いますが、母校大阪大学も、熊本大学よりもでしょうが、同様の状況であることを御理解いただき、大学基金への寄付や、土木建築分野の寄付講座の設置、共同研究の推進等に御理解を賜れば幸いです。・・・大阪大学学長のようなことを言ってしまいました。熊本大学もよろしく。

最近の建設業界について

構築工学科創設60周年にあたり「この10年を振り返る」という内容で執筆をという依頼があり自分自身を含めて振り返ることにしました。

10年前というと大阪で国体があり、私はその前年まで門真の地下鉄工事現場の所長として、所定の工期に間に合わせるべく、日々第一線にたって陣頭指揮をしていた頃で、これが最後の現場勤務となりました。今では現場勤務が懐かしく思えるとともに日々体力の衰え（メタボリックシンドローム）を感じています。

この10年の建設業界、特に近畿圏での土木を取り巻く環境を考えてみると、大きなプロジェクトもほぼ完了してきており、国や地方自治体の財政難も相まってインフラ整備に大きな翳りが生じているように思います。土木の建設市場は最盛期の半減に近い状況で、縮小傾向は今後も暫く止まりそうありません。ところが最近の自然災害の発生状況や、これまで整備を継続してきたインフラの今後の維持管理等に関しては心配な要素が多く危惧にたえません。本当にインフラの整備は進んだのか疑問もあります。今後、人口が減少し高齢化社会がますます進むなかで、インフラ整備に関する議論を深め、国民がどのレベルまでの整備を望んでいるのかはっきりさせ、インフラ整備のあり方を具体的に見出すためのシステムを築く努力が一層重要なようかと思います。

昨年のはじめにゼネコンの脱談合宣言以来非常な低価格入札が横行し建設業の将来に暗い影を落としています。建設業の経常利益がおしなべて3%程度であることの報道は片隅に追いやったまま、落札率が90%を超えると悪いことをしているように決めてかかるマスコミの「低入札率賛美報道」にはとても賛同できません。さらに低入札のしわよせは意に反して弱いところにいき、結果として現場の最先端で働く作業員に大きな影響を与えています。私は建設業の従事者には少なくとも結婚して子供を育てられるくらいの年収が必要であり、そうしないと建設業の将来は人材がいなくなってしまうのではないかと心配しています。入札制度改革に関しては、一般競争入札、



株大林組
友 廣 康 二 (C71)

総合評価入札制度、いわゆるダンピング防止を目的とした施工体制確認型入札制度等々の制度改革が進み始めており、現在は入札制度そのものが大きく変化を遂げる過渡期にあると認識しています。また業務のうえではパソコンが一人一台の状況となり、パソコンが活用できないと実務に支障ができるようになっています。結果としてパソコン業務に順応性の高い若手土木職員のデスクワークが増え、現場に出る時間を阻害しています。このことは現場でものを見て多くの経験を積み、失敗を重ねながら迅速に正しい判断する技術を身につける機会を奪っていくことになっています。技術の伝承が叫ばれ、2007年問題がクローズアップされる中この危機を乗り越えるシステムの構築が今後の大きな課題であると思います。海外進出も含め、高い技術力を持った会社がそのプレゼン能力を駆使し、コスト競争力でしのぎを削る厳しい受注競争が開始されるものと思われます。

全国の大学の学科名から土木という名前がほとんど消えて久しく、名前を変えた途端に志願者数が増加する傾向が顕著にみられるのは、なんとも寂しい限りです。土木学会員や土工協など各協会の会員数の減少に歯止めがかからず、世間の建設業を見る目の厳しさと歩調をあわせているように感じられます。現在世間の大きな関心のまとである地球環境問題についても大いに貢献できる建設業に対する国民の信頼の回復と建設業の魅力の向上を図るべく、今後も百万人の見学会等を通じ一般世間の信頼と期待を集めようとする真摯な努力が我々建設業界に従事するに課せられた大いなる課題ではないかと思います。

思いつくままに、この10年を振り返ってみましたが、今しばらくは建設業界の荒波の中で努力を継続していきたいと考えています。幸い社外でのいろいろな活動の場を与えられていますので微力ながら建設業界の一員としての立場で頑張っていきたいとおもっています。

末筆ではありますが皆様方のご多幸とご健勝をお祈り申し上げます。

大学院重点化から 10 年



大阪大学教授
出口 一郎 (C71)

世の中の移り変わり、あるいは人生（一生）は、よく十年を尺度とした時間で語られることがあります。論語では、三十にして立つ、四十にして迷わず、五十にして天命を知る

六十にして耳に順う、七十にして心の欲するところに従えども矩を踰えず・・ということになっています。これに従えば、阪大土木（構築会）は知命から耳順の段階を踏んでいることになります。

一方、十年一昔、十年一日という表現もあります。大学には十年一昔の部分と十年一日の部分とが共存しています。建設系の建物、エレベータ、学生定員、・・・、これらは十年どころか三十数年（四十年弱）の間、変わっていません。この十年間で大きく変わったものといえば、大学運営のシステム、国立大阪大学から国立大学法人大阪大学へ、教官から教員へ、退官から退職へ、助教授・助手から准教授・助教へ、女子学生の割合、等など数え上げれば限がありません。大学院重点化（1997）の事後評価も定まらないうちに、独法化が行われ、競争社会に組み込まれたわけです。ハードウェアは替えるのが難しく、ソフトウェアは、（新たな財源を確保する必要がないことから）容易に変更できるということでしょうか。

十年が長いのか短いのか？ということについて少し考えてみました。旧全総や新たに策定された国土形成計画の目標期間は、おおむね 10～15 年であります。国際的にみても「飲料水および衛生に関する国際旬年」、「国際防災旬年」なども 10 年単位の行動計画であります。何か新しいことを始めて、成果を出すには、やはり 10 年程度が必要なのでしょうか。

十年間、周辺の境界条件が変わらなければ、十年先を目指した計画も有効でしょう。すなわち、周辺の境界条件に依存しない、あるいは周辺の境界条件も含めて変革しようとする、より上位の計画は、十年程度の目標期間を設定して行動計画を立てることができます。

一方、われわれ対象となる大阪大学の中期目標・計画は、H16 年度に策定され、H22 年までの 6 年間が対象期間となっています。10 年先は、どうなっているのかわからないので 6 年が対象期間

となっているのでしょうか。また、独法化後に採用された准教授・講師・助教はすべて 5 年の任期付であります。この任期 5 年というのは、工学研究科では、平均的に見て 5 年で promote している（昇任あるいは転出している）ということが根拠になって決まったようです。大学における競争的外部資金の代表である科学研究費は、おおむね 3～4 年を研究期間として支給されます。21 世紀 COE も 5 年が対象です。したがって、われわれは、少なくとも 5 年～6 年先の状況を十分な精度で見通して、計画を立てる必要があります。

教授の平均的な寿命はほぼ 15 年です。大学の運営費交付金も、公共事業費同様間違なく年々削減されていきます。このような中で、少なくとも 2 期以上にわたる中期目標・計画を適切に作成し、実行していくことが要求されています。そのために、少なくとも 5 年以内に確実に結果を出せる研究テーマ、あるいは成果の出せる教育システムを考え出し、遂行・実現する能力、それを元に競争的外部資金を獲得する手腕が要求されます。独法化後に採用された准教授・講師・助教の方々は、5 年以内にしかるべき成果を上げなければならないという大きなプレッシャーを抱えていることも確かです。

種々御託を並べましたが、結論は、十年は長いようであり短い（短いようであり長い）、ということでしょうか。

この 10 年間に、海岸法・港湾法が改定され、環境庁が環境省に昇格し、国土総合開発法が国土形成計画法に衣替えしました。これらに伴い、社会基盤を取り巻く社会情勢、社会基盤整備の手続き・方法も大きく変化しました。少子・高齢化社会、地球環境（温暖化）、予想される東海、東南海、南海地震などへの対応、如何に安全で快適な社会・経済活動の場を提供するか？など、解決すべき数多くの問題が残されています。一方、学生の就職先は必ずしも「土木工学」の知識を必要としない分野が増えていることも確かです。このような中で、今後 10 年どのような阪大土木（社会基盤）を作っていくのか、いまだに迷いながら天命を探っている状態であるという感じがします。

厳しさの後に生まれるもの



株安井建築設計事務所
東京事務所所長

大村 鐵太郎 (A71)

構築工学科創設 60 周年にあたるこの年に期せずして記念特集の原稿依頼があり、小生も昨年還暦を迎えたこともあり感慨も深くお引き受けした次第。

「この 10 年を振り返る」というテーマにいろいろ思い起こしてみたが 10 年はあつという間の出来事で、大学を出て 35 年余りもほとんど矢の如しであった。大学 4 年生になって具体的にどの分野に就職すべきかを決めるほど十分な考えも持てず、2 年間休学して交換学生制度を利用し米国アトランタの小さな設計事務所で働く機会を得、その後大学に復学、それでも方向が見定まらず大学院に進み結果設計事務所が職場となった。それから一筋ではあるが、相変わらずあくせく迷いながら現在に至っている。

迷う歳ははるかに過ぎ、天命を知っていまや耳に従う歳になっているはずだがいかんせん修行が足りないようである。まあ、成年の小生としてはドッグイヤーで換算すると 9 歳になるかならない頃と勝手に思い自分のふがいなさを慰めている（既に 420 歳だという人もいるが）。

しかしながら、これを機会に小生のおかれている立場として設計業界のこの 10 年を振りかえると同時に自らの反省材料としたい。ただ、同じ設計業界でも小生は組織事務所に属しており、更に東京を中心に活動しているので（十数年前に東京事務所に転勤となった）偏りがある点はご容赦願いたい。

思い起こせば更にその 10 年前、建設業界はバブルのまっただ中で需要過多に対して種々の矛盾点を克服できないままとにかく需要に対応してきた。建築が経済を動かすとも言われた時期である。しかし、バブル崩壊後事態は一変した。急激な需要過小に対してほとんどの企業はリストラ対策を余儀なくされ、果ては倒産に至るところも出てきた。多くの設計事務所も例外なくリストラと一緒に給与を含む経費に関しても節減せざ

るを得ない状況に追い込まれた。

バブル崩壊後安値を続けていた株価も 2003 年後半から回復の兆しを見せはじめ不良債権も縮小し昨年後半ごろから不況を脱したかに見えている。だが、一方地域や業種間での格差問題が顕在化し、さらには環境問題、少子化問題、2007 年問題、耐震強度偽装問題など課題山積で未だいずれも解決していない。取り巻く環境はバブル崩壊後と余り変わらず、民間建設投資は若干の増加の兆しを見せており、その分公共建設投資は減少を続け結果的にはバブルピーク時と比して 3 割 5 分も落ち込んだまま快復していない。低価格入札をせざるを得ないところまで受託競争が起こっており、建設工事単価は低迷のまま推移している（これもやっと上向きが見えてきたか？）。

この状況の中設計業界の動きを見ると、発注に対するデスクロジャーが公共事業のみならず民間事業にも求められるようになり、公共の設計発注方式のほとんどが入札からプロポーザル方式に変わり、民間もこれに近いものを採用するようになってきた。この結果、設計受託にもより以上の経費が必要となり、建設費の低迷もあって設計報酬も減少し厳しい状況が続いている。従って受託の拡大と効率化による経費の削減は継続的な必要事項となっており、その対策として設計の業務内容や進め方にも変化が見られてきた。

設計の業務内容に関しては、ひとつには CM や PM と呼ばれるマネージング業務が多く生まれてきた。建築主の立場にたち事業全体をとおしてコンサルティングを中心とする部分を適切に代行する業務である。この業務の拡大に伴って新しい部門として、あるいは新会社として新体制をとる事務所も多い。また、今までの業務内容にも分化がみられ大型プロジェクトに関しては企画・基本設計・工事監理を設計事務所が行ない実施設計以下施工までを建設会社が行なう新しい形も見

られるようになってきた。わが国独自の発注形態である設計施工とは違い、建築主の多面にわたるリスク管理も含め最大の利益を確保するため生まれたものであり、今後も継続発展していくと思われる。また、同じ分化でも種々の業種とのコラボレーションによりそれぞれの得意分野で協働し最高の付加価値を見つけ出す業務形態も多く見られるようになってきている。

一方、効率的な設計業務の進め方に関しては、設計業界にも浸透してきた ISO9000、ISO14000 の認証が大きな契機となり深化したものもある。これら ISO のシステムは品質あるいは環境への企業の取組姿勢のプロセスを明確に示すことにより客観的に建築主の信頼を確保することにあるが、同時に設計プロセスを明確にすることにも大いに機能した。結果的に後戻りの少ない設計と確実な品質確保が無駄な業務を減らし効率化につながっている。また、CAD による設計は既に長年にわたり浸透しているが最近は 3 次元 CAD による統合的な設計の進め方も出現しており、効率化はもとより更に設計プロセスや施工プロセスのあり方をも大きく変えるのではないかと期待している。

このようにこの厳しい 10 年間の間にも新しいビジネスの可能性が芽生えてきており、今までの固定的な設計業務にとらわれることなく多面的にかつ総合的に一步踏み込んで業務を捉えればまだまだ多くの新しい発展が設計業界にはあると思っている。厳しさの中から次のイノベーションが生まれるものである。

設計事務所に勤めるものらしくもっとデザイン面の楽しい話も入れたかったが紙面の関係もありこのあたりで、大阪大学、工学部地球総合工学科、大学院工学研究科地球総合工学専攻各部門、構築会の益々のご発展を祈念して筆を擱かたい。

「官」から見たこの10年と 今後の展望



橋 本 彰 (A72)

「この10年を振り返る」時、社会潮流を表わす言葉として

- ・グローバルな視点から一・国際化、情報化、環境問題他
- ・国内的視点から一・人口減少・少子高齢化、官から民へ、安心安全、都市と地方等が思い出される。

このような社会潮流の中で特に「官」の分野で、土木・建築界に関連する変化を見たいと思うが、潮流に対応する「法律」をたどればよく理解できる。

<公共投資>

- ・財政構造改革推進特措法（平9）－公共投資量的縮減目標設定

<官から民へ>

- ・民間投資活用公共施設整備促進法（PFI法）（平11）
- ・高速道路株式会社法（平16）

・都市再生機構法（平15）

<地震－安心安全>

- ・建築物耐震改修法（平14）

・住宅品質確保促進法（平14）

- ・マンション建替え円滑化法（平14）－阪神・淡路大震災の教訓から耐震化、マンション再編の円滑化

- ・（新）建築基準法（平18）－構造計算偽装問題への対応

<都市と地方>

- ・中心市街地活性化法（平10）－空洞化した中心市街地への対策

- ・構造改革特別区域法（平14）－都市再生、地方再生

<少子高齢化>

- ・介護保険法（平9）、高齢者移動等円滑化法（バリアフリー法）（平12）

<環境>

- ・建設工事資材再資源化法（平12）、シックハウス法（建築基準法）（平15）

<国民意識>・情報公開法（平11）

- ・行政手続き法（平7）（パブリックコメント法）－国民の価値感の多様化、参加意識への向上に對して

法律名だけ見ても、どのような10年かよくわかる変化の激しい10年であった。

「今後の展望」であるが、底流には社会の人口減少社会という大前提が存在する。日本は2005

年から人口減少社会に突入、世界的にも例のないスピードで進むと言われている。

現在、高齢者人口1人に対し生産年齢人口が3人だが、2030年には2人ということになり、社会福祉負担の増、「官」の投資余力の縮小等、社会全体として非常にきびしい状況になると言われている。過去に経験したことのない社会経済情勢の変化の時代であるが、将来の安定した社会に向けて、国づくり、都市づくりへとビジョンが各界から提案されているが、ここでは「官」のビジョンをまず紹介したい。

- ・国土交通省「これから重点政策」（平19）－「次世代に引き継ぐ国土づくり、くらしづくり」
- ・世界の成長と活力をわが国へ取り組む基盤づくり
- ・自立した活力ある地域づくり
- ・歴史風土に根ざした美しい国土づくり・地球環境に対応したくらしづくり
- ・安全・安心で豊かな社会づくり
- ・東京都「東京構想2000」（平12）－「千客万來の世界都市」
- ・活力と魅力あふれる人・もの
- ・情報が交錯する東京
- ・神戸市「2010ビジョン」（平17）－「豊かさ創造都市こうべ」
- ・市民生活の豊かさを基準として交流・融合が新たな価値の創造するまち

これらのビジョンに、多様な軸が交錯しているのが解かる。このきびしい時代に挑戦していくなければならないが、私自身、特に行政においては、次のような視点が必要ではないかと考える。

一つ目は『融合』の視点で産・官・学等の多様な価値の「融合」によって新しい価値を創造することが重要ではないか。土木・建築分野に、例えば、環境・教育・芸術等の分野と融合する事により、変化するくらしに対応した最適解を提案する時代ではないかと考える。

二つ目は『協働と参画』の視点で国民や市民と産・官・学との『協働と参画』により、様々な主体がプロセスに関わることにより大きなパワーが生まれる。特に神戸は震災復興過程で再認識している。

土木・建築界の今後の展望という要請でありましたが、このような激変の時代でもあり、皆様に材料提供することで、お許し願います。

大学の変化—私が見た独法化と国際化



京都工芸繊維大学教授
森 田 孝 夫 (A72)

私が適任とは思えませんが、この10年の大学の変化を書くことにします。歴史書を書く能力などもとよりありませんので、間違いがあればご勘弁ください。

大学の変化のひとつは、国立大学が「国立大学法人」になったことです。外から大阪大学を見ていますと、わが母校はこの機会をのがすまいと張り切っているようです。

建築工学系では、2006年にフランスのDominique PERRAULT(1953年生まれ)を招き、ワークショップが開かれたことが話題になりました。世界的な建築家が来てオペラ劇場の設計・計画を教える企画が実現したのは、彼のスタッフの一人である前田茂樹(98年卒)さんの働きかけもあるでしょうが、やはり法人化への意気込みがあつたと思います。

これまで文部科学省は、使い道を定めて予算を大学に交付していましたが、法人化後、使途の拘束がゆるやかになりました。全体的な傾向としては、教員への研究費を減らし教育や学生のための環境整備にお金を使うようになりました。研究費が必要な人は、研究補助金の募集に応募して、競争的外部資金を獲得しなければなりません。いきおい地味な研究には研究費がつかないという噂がささやかれるようになりました。

次の話題は「教育の国際化」でしょう。今から約20年前、私のゼミにいた香港からの留学生は、帰国して設計事務所に求職しても建築系大学院修了と見なされず、かといって日本で得た学歴はイギリスの建築士試験の受験資格にならず、結局鹿島に工事監理の通訳として勤めました。我が国の建築教育が、国際的に認知されないことにショックを覚えました。その後、貿易の自由化の一環として、アメリカとイギリスが主導して資格の世界標準化をめざしている時、レベルは高いが外国では通用しない技術者資格のままでよいのかという議論がおき、アメリカ等の技術者資格の受験ができる国際的な同等性をもつ教育プログラムをつくることになりました。

1999年に、国際的に通用する技術者教育プログラムであるかどうかを審査し認証する日本技術者教育認定機構(JABEE ジャビ)が発足しま

した。JABEEが求める能力を要約しますと、科学・技術・情報を駆使して地球や自然や社会の要求を解決するデザイン能力と各専門分野の能力といえるでしょう。JABEEが建築分野に求めた基準は、UNESCO/UIA (International Union of Architects) の教育基準と少し異なりました。UIAは教員に実務家を入れることを条件にしていましたからです。

この10年間、日本建築学会では、欧米や東アジアと日本の建築教育との共通性や違いを調査し議論してきました。UIAを支持する人々は、建築計画の科目は外国にはないからおかしい、建築教育は設計教育を中心だと強い意識をもっていましたが、国によって建築教育プログラムが異なり、アメリカ標準がそれほど大きいシェアでないことがわかつてきました。その後、建築学会が、自然災害や過密問題等をかかえる我が国の建築教育の成り立ちを世界に説明する努力を重ね、大学院 JABEE の建築系の分野別要件に、UIAが求める「建築設計・計画に関する実践的能力」「教員(団)に実務家も加える」などの条件を入れ、建築系教育の国際化を図る原案を2006年末に策定したわけです。

我が国では建築技術者と建築士と建築家の三つの名称が共存して建築業は展開され、一級建築士の免許をもつ建築技術者、一級建築士の免許をもたない建築家も優れた仕事をしています。教育行政と建築業の管轄省は異なりますが、これまで文部科学省の学問性と国土交通省の実務性が上手にブレンドされた自由な大学教育が行われていたと思うのですが、第三者が認証するきちんとした建築教育プログラムがないと、世界的な資格の標準化へ対応できない時代が来たと思います。

この10年は、夢がふくらむような変化もありましたが、リストラが進められ、勝ち組、負け組という嫌な言葉も生まれました。昭和43年入学の我々が厳しい50歳代を過ごした時代とぴったり一致します。しかしふィーブーム世代の我々は、生まれた時から試験が待ちかまえていたので、しぶとく生きていけるでしょう。このしぶとさを後輩にも期待したいものです。

この10年を振り返る



大阪府都市整備部長
福 田 保 (C73)

構築工学科創設60周年、心からお祝い申し上げるとともに、輝かしい実績を積み重ねられた教室や先輩の皆様方に深く敬意を表します。地方行政を担う立場から、この10年を振り返り、現在も課題となっている3つの事項について思いつくままに書いてみました。

行財政改革と建設事業費の縮減

わが国経済は「いざなぎ越え」といわれる着実な回復を続けており、大阪経済も企業の努力、官民一体となった産業再生への取り組みが相まって、全国を上回るスピードで力強い回復を続けている。

最近は、関西国際空港が第2滑走路の供用により、本格的な24時間国際空港となり、またシャープ㈱が液晶テレビ販売の世界戦略拠点として堺2区への進出を決めるなど、明るい話題がある。

一方、府財政は平成10年度以降9年連続して赤字決算となり財政構造の弾力性を示す経常収支比率は依然97%という高い値で、硬直的な財政構造が続いている。

府債残高は5兆円を超え、減債基金（府債償還の為の支払準備金）から4900億円もの借り入れをしている状況である。

平成8年度に財政健全化方策（案）が示されてから「再建団体転落」への回避を最大の課題として、人件費の抑制、組織のスリム化など、4次に亘り行財政改革が進められた。

建設事業費はピークである平成7年度に比べ4400億円の減少、率にして実に66%の削減となつた。

平成18年11月には、「赤字構造からの脱却と次世代負担の抑制へ」を目指し、「大阪府行財政改革プログラム」が策定され、組織の再構築や民間や市町村との役割分担の見直しさらには建設

事業の重点化などに引き継ぎ取組んでいるところである。建設事業費については、府財源ベースで平成19年度に10%、平成20年度以降は15%の縮減となっている。維持管理や東南海・南海地震による津波や耐震対策は削減対象外とし、阪神高速道路大和川線の建設や集中豪雨による都市型水害対策など大阪の再生・成長や府民生活の安全・安心の実現に向け、事業の重点化・効率化を図っている。

今後は、高度経済成長期に建設された橋梁などの大量更新時期を控え、その財源確保と予防保全を柱とする計画的な補修制度の確立が緊急の課題となっている。

多様な自然災害対策

平成7年の阪神淡路大震災では数多くの都市基盤施設が倒壊し、土木の安全神話が脆くも崩れた。現在、東南海・南海地震の発生が現実的になる一方（今後30年以内に60～70%の確率で発生）、東海水害や福岡水害に見られるよう豪雨に対する都市の脆弱さが露呈した。府内でも、100年に一度と考えられる豪雨が毎年各地で観測されている。これまでの河川改修や防潮堤など施設整備により「行政が被害を防止」することを最重点とする災害対策から、災害が発生することを前提に「行政・住民協働による被害の軽減」という観点の対策を併せて採るようになった。行政から危険情報をほとんど公表していなかったが、津波や豪雨による浸水想定図の公表や避難場所等を表示したハザードマップを住民に配布、インターネットを利用し雨量や水位などの防災情報をリアルタイムに提供するほか、気象台と共同で警戒情報を発令している。今後は、これらの精度の向上と住民への確実な伝達システムの改善が必要である。

お詫びとお手紙のつづき

（略）建設省工務課課長
（略）内閣府大臣

入札・契約制度の改革

公共工事の発注をめぐって、これまで首長や議員、職員などがかかる不祥事が繰り返されてきており、その都度入札・契約制度の改善を行ってきた。大阪府でも、予定価格の公表、最低制限価格の廃止、公募型指名競争入札や電子入札の導入など、毎年のように新たな取組みを行ってきた。平成17年4月に「公共工事の品質確保の促進に関する法律」が施行され、大阪府でも総合評価落札方式を導入し、今年度は90件を実施、今後さらに拡大を予定している。

一方、大手ゼネコンの談合決別宣言や独占禁止法の罰則規定の強化に伴い、高落札率の入札から一転し、異常な低価格競争が頻発している。平成18年度には、特に大型工事で平均落札率が60%に近く、議会からも品質の低下、下請業者へのシワ寄せを懸念する声が大きくなつた。このため、超低入札を回避するため失格基準価格を導入したところである。これらの低入札調査に当たつては、様々な根拠資料の提出を求めざるを得ず、限られた時間と人員による調査の負担は予想以上のものとなつていて。また昨年の「全国知事会」の緊急提言を受け、電子入札や一般競争入札への転換が強化されたところである。今後は、入札・契約について、制度改革だけに留まらず、関係者のコンプライアンスの確立が不可欠となつてゐる。

（略）建設省工務課課長
（略）内閣府大臣

（略）市役所議長
（略）建設省工務課課長
（略）内閣府大臣

（略）建設省工務課課長
（略）内閣府大臣

（略）建設省工務課課長
（略）内閣府大臣

（略）建設省工務課課長
（略）内閣府大臣

（略）建設省工務課課長
（略）内閣府大臣

「耐震設計技術」の果たすべき役割とその限界

兵庫県南部地震以降、日本列島の随所で頻発するマグニチュード6.0を超える大地震、さらに、今世紀中盤までには東海・東南海・南海地震がわが国を襲うことは必至であり、加えて、首都東京をはじめとする主要都市における直下型地震の可能性が指摘されているところである。筆者は30数年ゼネコンの設計部に在籍し、構造設計に従事する機会を与えられた。構造設計に従事し始めた頃は、建物の設計にあたって何度も行われる客先との打ち合わせにおいて、「地震」「耐震」などが話題になることは、残念ながら皆無に近かった。客先の建物の耐震安全性に対する関心は乏しく、どちらかと言えば構造設計（耐震設計）の世界で仕事をしている人間は、客先、ひいては社会からは「お呼びでない存在」であったかもしれない。「地震」は現象ではなく、設計規準類、研究論文などに登場する「語彙」であった。筆者自身、お恥ずかしいことに、阪神・淡路大震災のあの惨状を目にしたとき、「地震は起きるんだ。」と何とも情けない実感を持ったことを思い出す。

ここ10年、阪神・淡路大震災を契機にその様相は大きく変化しようとしている。最近は、「耐震強度」なる用語（造語？）まで登場し、耐震設計、耐震安全性なる概念がある意味で市民権を得始めたと言えよう。それまで、社会とは無縁の独自の世界に閉じこもって黙々と構造設計行為に邁進してきた者が、社会との対話と言う舞台に登場することになったのである。すなわち、社会に対するインフォームドコンセントの重要性が大きくクローズアップされるに至った。社会に向けて耐震安全性についての情報を発信するためには、まずは、建物の耐震性能を明らかにすることが必要になり、建築基準法は性能規定へと移行し、「性能設計」と言う言葉が世の中を席巻することとなった。ここ10年の耐震設計技術面の成果に関しては、実大規模の構造物を対象とする大型実験施設、大型3次元震動実験施設の稼動にも後押



武庫川女子大学
生活環境学部建築学科教授
福本早苗（A73）

しされた、

- (1) 免震技術の発達と普及
- (2) 既存建築物の耐震改修技術の向上

を挙げることができよう。科学技術の目的が、あまねく人々に能力や地位にかかわらず平等に快適な生活を提供することにあるならば、上記の技術（1）、（2）の目指すところも、それら技術が広く適用・導入されてこそはじめて達成されることになる。しかしながら、厄介なことに、社会との対話はまだ緒についたところであり、科学技術の成果を享受する立場にある生活者が耐震安全性について十分な理解を得るには至っていないのが実状である。したがって、自助努力を前提とした地震防災実現への道が遠のくのは当然の結末である。住宅について言えば、自分の住まいの耐震安全性をどれだけ身銭をきって手に入れるか、何が適正な投資か、悪徳業者の口車に乗ったりはしていないか、自分の生きているうちに本当に地震が来るとは思えない（思いたくない）など悩みは多く、日々の費用対効果の見えづらい投資は敬遠され、耐震性確保・向上の道は極めて険しいものとなっている。耐震設計技術のさらなる普及、地震防災実現ための特効薬は見当たりそうにないが、科学技術ではない社会学、経済学、心理学など人間・社会の構造をあつかう分野との協働も視野にいれながら、「防災教育」と言う見地からも愚直に地道に「対話」を続けることが求められるのではなかろうか。もちろん、行政サイドの耐震安全性向上、耐震改修に対する補助金提供のための実効性ある枠組みの再構築が急がれるることは言うまでもない。国から支払われる震災後の被災者生活支援のための数百万円は、被災を未然に防ぐことにこそ使われるべきものであると考える。

この10年間における公共事業に吹き荒れる嵐の中で

この10年間における出来事の中で、官の立場で公共事業に携わる者として強く印象に残っていることは、公共事業予算の大幅な削減に伴う事業数の減少や各実施事業における大幅なコスト縮減、さらには過激なマスコミ報道に引っ張られる形での「公共事業不要論」の嵐です。私自身、1984年の建設省（現国土交通省）入省以来、一貫して、土木技術に係る研究開発ならびに災害時の対応を含む技術指導や成果の普及を担う土木研究所においてダム技術の研究・開発、個別ダム事業における技術指導に携わってきましたが、数多くある公共事業の中でも最も風当たりが強いのが、この「ダム」だと言えます（確信します）。この原稿を執筆していた、2007年8月30日の日本経済新聞において「ダム建設費膨張 9兆円」という見出しの記事が1面を飾り、無駄な公共事業復活などの過激な内容となっていました。ダムに携わる者としては、ダムの事業費が当初計画より増加しているのは事実としても、いかにも「ダム」＝「無駄（ムダ）」と決めつけた論理展開にはまだ腹立たしい思いでした。特に、最近の異常気象とも思える多くの台風の上陸や集中豪雨等による水害の頻発をみると、どうしてこのような記事が書けるのか、怒りを通り越して呆れかえってしまいました。このような状況が続くことで、今後のダム事業、ひいては公共事業の担い手となる若手技術者のやる気を殺ぎ、これまで蓄積してきた多くの優れた技術の継承ができることが心配でなりません。

ここまで内容だけですが、「この10年間何も良いことはなく、今後の公共事業に関して全く希望がもてない」となってしまい、若い技術者の将来の希望までも摘み取ってしまう、ろくでもない投稿文だと思われるでしょう。

しかし、私、および私の所属する土木研究所のダム部門においては、このような厳しい状況であったからこそ達成できたのではないかという、いくつかの大きな技術的な成果があります。その成果に至る流れは次の通りです。「公共事業を限られた予算の中で効率的に遂行するためにはコストの縮減が必要である。コスト縮減を図るために



独立行政法人土木研究所
山 口 嘉 一 (C84)

には適切な技術的な検討が必要である。この技術的成果は研究レベルでとどまっていたのでは事業費に結びつかない。そのため、技術的な成果を基準化して、個別の事業に反映させやすくする。」ダム分野に身を置かれた方には、理解しづらいかもしれません、ダムの設計方法は、何十年も大きな変化がなく、各種細部技術についても、経験の積み重ねの上に成り立っているものが多く、設計基準など表面的には大きな変化がなかった分野といえます。しかし、この10年の間に、ダムの基礎岩盤の遮水性や力学特性の改良を目的として、セメント懸濁液を岩盤に注入し亀裂などの空隙を充填するグラウチングの徹底的な合理化を図るための技術指針の改訂を行いました。また、ダムの堤体は、極めて古典的な震度法により設計しているため、レベル2地震動などの大規模地震動に対する耐震性能を説明することが難しかったが、損傷発生を考慮した動的解析を用いた解析により耐震性能を照査するための「大規模地震に対するダム耐震性能照査指針（案）」を作成しました。さらには、コンクリートダムやフィルダムといった従来のダム型式にとらわれない新型式のダムの検討にも携わってきました。これらの新しい指針などを提案したからには、その後の現場への適用に対する監視を十分行い、適切なフィードバック検討の必要があります。まさに、これからがその時です。ダムのハード技術は、この10年で、今までに破れなかつた殻を破ることができました。そのきっかけが、外的な要因によるところが大きいことはやや残念ですが、ダム技術者にとってのエポックメーリング的な時代であったと思います。同様なことが、他の分野においてもあったと思います。今後は、この流れを絶やさず、さらに大きな成果を達成していく必要があります。そのためには、若い技術者、あるいはその予備軍である学生諸君が我々の技術を継承してくれることが必須条件です。

陳腐な表現ですが、「誰かがやらなければならない」、いや「私がやらなければ誰がやる」の精神で頑張りましょう。

都市再生から見た、この10年



独立行政法人都市再生機構
田 中 伸 和 (A86)

社会人になって既に20年を越えました。今、都市再生に係るプロジェクトに従事しています。この度、この紙面をお借りして都市再生の面から、平成10年(1998)から平成19年(2007)の10年間を振り返ってみました。

この10年は、バブル景気崩壊後の所謂、「失われた10年」の後半であり、現在の回復景気の始まりの期間です。この間、既存の社会的フレームが見直しを迫られ、結果として、都市・住宅政策も大きく様変わりすることとなりました。

まずこの期間において解決が最も優先された課題は、バブル崩壊がもたらした大手金融機関の破綻や住宅金融専門会社の破綻に伴う公的資金の注入後の処理であり、それはすなわち不良債権処理でした。

これを背景に、都市政策として平成11年(1999)に「都市再構築総合支援事業」と「大都市居住環境整備推進制度」が創設され、京浜臨海部等において大規模工場跡地の土地利用転換を目指した、所謂、土地柄を変えるプロジェクトがスタートしました。

事業環境としては、この時期が失われた10年でも後半にあたることから、駅前再開発等バブル景気前から取り組んで来ていたプロジェクトが再び動き出した時期でした。多くのプロジェクトにおいて、バブルで夢見た無謀な計画から原点に戻った現実的な計画が、時間をかけて事業者、権利者に受け入れられるようになった時期と言えると思います。

またさらに、平成13年(2001)の緊急経済対策において、不良債権処理、都市再生本部の設置、証券市場の構造改革が具体施策とされ、土地の流動化政策が都市再生を舞台に本格的に動き出すこととなり、平成14年(2002)には「都市再生特別措置法」が施行され、都市再生緊急整備地域の指定や、都市計画提案制度、都市再生特別地区が制度化されました。その結果、都心部の主要な地区が緊急整備地域指定を受け、都市再生特別地区の活用による再開発プロジェクト、所謂、白地からの再開発が各地で始動しました。

これら一連の動きのなかで基本となるのが、民間活力の活用であり、すなわちそれは規制改革、行政改革、公的セクターの再編を意味することとなりました。

一方、住宅政策の面からは、平成15年(2003)国土交通省の諮問機関である社会資本整備審議会住宅宅地分科会が「新たな住宅政策のあり方について」で住宅建設計画法の抜本見直しを行いました。これを受け、住宅建設五箇年計画は第8期(平成13年度から平成18年度)で終了することとなり、併せて公的住宅供給の三本柱であった公庫、公団、公営の改革が行われました。

さらに昨年、構造計算書偽造問題を背景に住生活基本法が制定され、民間事業者に各種の責務と情報提供を課し、国と地方公共団体は耐震改築の促進、性能表示制度の普及等の具体的な施策を講じることとされました。この結果、コンプライアンスの側面から住宅供給市場に新たな動きが生まれようとしています。

現時点では、GDPが連続10四半期プラスになるなど景気が回復し、徐々に事業環境が変化しています。16年ぶりに基準地の価格が全国でプラスに転じ、3大都市圏では価格下落は底を突き、反転上昇しました。しかしながら、これは局地的な地価高騰が全体を押し上げての結果であり、謂わば、局地バブルが起こっているということではないかと思われます。

また、平成19年上半年の首都圏でのマンション供給は、着工戸数を大幅に下回りました。要因は様々あると考えられますが、「値上がり見込みの売り惜しみ」や「市況悪化を嫌った時期ずらし」などは、バブル期に見られた現象のひとつです。

これからさらに10年の後、20年を振り返ってみたとき、この10年の改革と今後10年の動きが、「新たな失われた10年」ではなく、「輝ける都市再生」を生み出すことを願って止みません。そのためにも我々「まちづくり」に携わる者に課せられた、「物事を正しく見定め、よりよい方向へ導く役割」について、正に今、再認識する必要があるように思われます。

沿岸環境研究会を閉じて

名譽教授 権木亨

今年の2月末で5年続いた沿岸環境研究会を閉じ、現在は大阪朝日ビルにある「災害科学研究所」に理事長として毎日出て「災研」の運営に励んでいます。5年間という時間は長いようで短いものでした。毎日淀屋橋から中之島を通って堂島ビルまでかよっていたわけですが、中之島の四季折々の風情は阪大、大阪産大時代と違った日々を感じさせてくれました。その時感じたままに私の随筆として研究会の年間報告書の付録につけたわけですが、知らぬ間に50編を超える数になってしまいました。研究会を閉じるにあたって、記念誌的なものをと考えましたが、これも年間報告書に毎年掲載していました豆知識を再整理して6つの項目にわけ「沿岸環境の豆知識」と題して44ページの小冊子に纏め、会員の皆様に配布しました。これも比較的に好評で会員会社から追加要望もあり現在手許には10部程度しか残っておりません。この様に研究会は大過なく過ごして閉じたわけですが、その間に建設業界は大荒れになりました。しかし関西国際空港の2期工事は順調に進み今年の8月には限定供用とはいいながら、飛行機が離発着するようになり、この工事に関係した私としましても一息ついた思いがします。いま大阪湾の浚渫孔の跡地が貧酸素状態になって漁業者の方がこまつておられますが、その環境改善のために取りまとめ役をしております。これもできるだけ早く実試にうつしたいと願っております。私も今年で76歳になり、昨年は大学の同級生であつた柴田京大名誉教授、元阪神道路公団調査役の松本君が立て続けになくなりました。これからするとあとどれだけ頑張れるかわかりませんが、体力の続く限り「災研」で頑張りたいと思っています。体力増強策といえば、まだ1回しかやつておりませんが、昭和33年卒の木村さん、昭和34年卒の清水さんとOUC会のシニアゴルフ会をもつようになりました。週日のすいたゴルフ場で引退組がゴルフを楽しもうとしております。もしご希望の方があれば権木にご連絡下さい。この様な企画をするとまた権木がいらんことをすると、若い人からお叱りがあるかもしれませんがあしかださい。来年の構築たよりが書ければよいのですが？

大阪の温泉 —— これから地下水の利用と保全

名譽教授 村岡 浩爾

大阪の都市域でいつでも温泉が楽しめるようになってきた。同窓生の中にはこここの温泉はボクが仕事で関わったのだ、あるいは設計したのは私だ、という人もおられることだろう。

ところで大阪府域にいくつ温泉があるかご存知だろうか。大阪府に届けられた数は約160ヶ所、うち利用されているのは約60ヶ所、その約半分が大阪市内にある。日本人の温泉好きはいうまでもない。世界有数の地震国日本は火山列島のお陰で温泉の宝庫でもある。つまり危険と背中合わせであるが、貴重な温泉資源に恵まれ、それをうまく都市域にまで活用しているのが現状である。

私の所属する（財）日本地下水理化学研究所は、本年春から夏にかけて「平野の深層温泉一大阪府域の温泉を例にして」という研究会を3回にわたり開催した。コーディネータを勤めて頂いたのは本研究所の熊井久雄 理事（大阪市大名誉教授）である。温泉の加水、加熱、循環、薬剤添加等で明確なルールがなかった上にこれらに関わる温泉事件などがあつて、温泉法の一部改正がこの4月に公布されたこと、掘削技術の発達により1000m深の温泉開発も容易になったことなどにより、大阪の温泉が資源利用と管理の面で今後何を問題にすべきかを考える研究会であった。

話題提供は行政、業界、研究の分野から行われたが、私が先ず着目したのは 益田晴恵 氏（大阪市大教授）の話題である。大阪平野の温泉は阪神間から北摂に位置する温泉群と、平野中央部、とりわけ上町台地から西側の市街地に分布する温泉群があり、前者は質的に見ても温泉らしい状態を保っているが、後者は豊富な地下水が、深層であるが故にそれなりの水質と水温を保持している状態といえる。ところが最近、この市街地の温泉で水温と水質の濃度が低下しているという傾向がある。これは温泉の揚水が面的にも量的にも拡大したため、揚水井戸周辺で水流の鉛直移動や難透水層からの水の浸出が促されたという可能性によると考えられている。

一方、三田村宗樹 氏（大阪市大准教授）の話題にも注目した。大阪平野を構成する第四期層は最深部が1500mにおよび、その地質構造は大変複雑である。地下水流动系に着目した水理地層の大きな分類は、先ず表層に不透地下水層があり、次いで30~50mの上層部がある。その下部は地表面下70~150m深までの中層部、170~600m深までの下層部、それから基岩までの最下層部と考えられる。この層区分と社会活動の対応を考えてみると、例外はあるものの、表層部と上層部は土壤・地下水汚染の場であると同時に液状化が起こる層である。それに、昨今、専用水道と呼ばれる地下水の小規模利用の有用手法として注目を浴びているのはこの層である。下層部はかつて工業揚水の確保のため大量の地下水を揚水して地盤沈下を招き、その防止策としての揚水規制によって地下水頭が回復して、今度はそれが原因でビルの浮き上がり、地下工事に対する障害などが懸念されている。最下層部は、現在のところ、本論の主題である温泉開発とその資源保全の対象となっている。

ここまで書いてくると、もう温泉だけの話ではない。そもそも大阪の地下水は悪者なのか優良株なのか、はたまた無視すべきものなのか。私は日ごろから地下水をどんどん使えと言っている。ヒートアイランド防止、透水性舗装の多目的化、水循環の促進、地下熱利用、危機用水を一例とする新たな水資源、もちろん利用と保全が両立する適正な地下水管理があつてのことであるが、これまで日陰にあった大阪の地下水に日の目を向けていきたいと思っているのであるが、如何なものであろうか。

酷暑お見舞い申し上げます！

名譽教授 森 康 男

今年の夏は特に厳しい暑さでした。ここ京都市でも連日35度を超え、最高は39度近く、全く「想定外」の暑さになりました。皆様がこの拙文をお読みになるのはもう涼しい晩秋のころでしょうが、標題のようなお見舞いの言葉がつい出てきてしまします。

☆ ☆ ☆

今年もわれわれの職業に大きな課題を提起する事件が起こっております。

米国での橋梁崩壊事件は、二十数年前の「荒廃するアメリカ」*をまた思い出させました。1981年にTIME誌に掲載された特集記事で、華やかに宇宙ショーを繰り広げている米国の道路や水道やダムが、長年十分な維持管理が行われず、いたるところではころび始めているという指摘にショックを受けたものです。なんと、スクールバスが橋の手前で児童を降ろして歩いて渡らせ、バスは低速で橋を渡り、橋を過ぎた地点で再びバスに乗せるという光景もあったということです。その後米国では財源等を充実させて、「荒廃」をおしとどめたと聞いています。

これはレーガン政権の緊縮財政時代に指摘されたことですが、現在のわが国もこれと同じような状況におかれています。財政再建のために、国の公共事業費は毎年3%ほど縮減されてきています。また、来年度から道路整備で余った道路特別財源は一般財源化することになっています。国道については5年に一度点検するシステムがあるらしいですが、県道や市町村道では点検システムはないので、近い将来県道などの橋は安心して走れなくなるかもしれません。

橋に限らず、道路、上下水道、ダムなどあらゆる構造物は老朽化します。建設は華やかで誰でも注目しますが、日常的維持管理は地味で、おろそかにされがちです。そして、しばしば手痛いしっぺ返しを受けます。国民の安全を確保し、社会経済活動の基盤を維持し続けるために、嘗々と建設してきた社会基盤施設の合理的な維持管理システムを、人とお金をかけて構築し、実行しなければならないでしょう。道路特別財源は余ることはないと思います。

☆ ☆ ☆

柏崎刈羽原子力発電所の事故では、「想定外」という言葉が連発されました。報道によると、地下5階に設置されていた地震計では680ガルが測定されたが、想定していた設計加速度は273ガルであったといいます。その結果、千数百か所に破損が生じたということです。

原発の耐震設計については全くの素人ですが、もし破損したら何十万人、あるいは何百万人が放射能汚染を受けるという、重要な構造物である原子炉の設計加速度としてはこの程度で良いのかと（2007年に基準が見直されたらしいですが）、疑問に思います。

断層の存在とそれに起因する地震をどのように評価するかが議論されているようですが、最近の報道によると、最悪の場合を考えて設計加速度が決められていないようです。

自然の猛威は、しばしばわれわれの想定を超えます。しかし、いつまでも「想定外」と言って済ませられません。阪神淡路地域に数百ガルを越える大地震が来ると殆どの人が想定しませんでした。原発のような重要構造物の安全に関しては、常に「想定外のない想定」を行うという理念が必要ではないでしょうか。

☆ ☆ ☆

規制緩和と構造改革によって、日本経済のグローバル化が進み、今や何事においても経済的効率と利潤の最大化が社会の唯一の目的となったかの様相を呈しています。この様な社会では、国民の安全や福祉は軽視され続けます。しかし、プロの土木技術者あるいは建築家であるわれわれは、この様な風潮に流されることなく、安全な社会を建設・維持するために、的確な判断と行動を継続しなければと、考えさせられる夏でした。

末筆ながら、会員の皆様方のますますのご活躍とご健勝をお祈りします。

* 岡野行秀監修、古賀一成訳：荒廃するアメリカ、開発問題研究所、1982、原書：Pat Choate and Susan Walter: America in Ruins

(また²) どうでも良い近況

名譽教授 舟 橋 國 男

またまた詰まらない話で貴重な誌面を費やすことになり相済みません。昨年は書く程のことも無く失礼しましたところ、今年は穴埋めするようにとの幹事長・玉井昌宏先生からのお達し。非常に困りましたが「近況」ということで、取り敢えず筆の（指の）走るままに…

MERA（人間・環境学会）に設置されている「建築社会学」ならびに「人間環境系倫理」を考えるそれぞれのグループに属している関係から、人間がものや建築物やまちをつくることについて、支離滅裂ながら少しばかり考え込まされている。なぜ、そのようなものが、そこにあるのか？

例えは、乱立する超高層分譲共同住宅は、当該近隣や地域社会の住環境形成への一切の意思を持たず、維持管理や更新に関しても将来に禍根を残す虞が大きい。当面の利潤を追求する経済論理、「可能なことは何でもして良い」という技術の行動、搔立てられる消費の欲望、等によって産み出されつつある姿は、かつての「ミニ開発」とその大きな社会的負債を解消する為に費やされている膨大なエネルギーを彷彿とさせる。「50年後なんて考えて売ってません。私、そこまで生きてませんから」という大手マンション業者役員の発言（朝日新聞 2006.07.12）は余りにも衝撃的である。次代に残されてしまう都市環境がこのような非倫理的行為によって形成されつつあることは、地球環境だ温暖化防止だともっともらしく言う以前の、正に社会的不正義としか言いようがない。

しかし一方で、今年のMERA大会時の「人間環境系倫理」に関するワークショップでは、超高層マンションが売れている現象について、「人々が良いとすることは良いとするしかないのではないか」とか、否、そのような言い回し自体が“学会”などに潜むエリート意識でしかなく、“住民から学ぶ”と言うまちづくり活動の常套句こそ専門家の忌まわしい住民蔑視の裏返しではないか、等々。更に、社会的規範・倫理と個人の日常生活行動との不一致、「分かっているがしない（出来ない）」という行動様式、それなら逆に、例の流行りの「もったいない」とか、「ハチドリのひとしづく」とか、できる（と勝手に思う）範囲のことをすれば良いし、現実にはそれしか仕様が無いではないかとか、しかしそのまた唾棄すべき偽善性は鼻持ちならぬとか、ウンヌンカンヌン。侃々諤々。

思えば、私が大学入学した昭和35（1960）年はあの60年安保闘争の時、授業等はそっちのけ、「アンポハンタイ！キシヲタオセ！」—お孫さんゴメンネーと筋骨隆々の機動隊と小競り合いなどしていた、その青春の名残というかその後の政党への失望感や政治への挫折感は未だに拭いきれずに昨今益々強くなる。その反動か、あるいはウブな一時期（私にもかつてはあったノダ）にインプットされたもの（麻疹？）の残渣か、建築の社会性や倫理性に強く惹かれているのであろうか。そう言えば昨今の麻疹は子どもに限らぬとか。

それやこれやを徘徊しつつ巡り会った、佐々木力「21世紀のマルクス主義」（ちくま学芸文庫）と市野川容孝「社会」（岩波書店）は素人にも興味深く読めた。未読の方にはお勧めしたい。

だがしかし、こんな駄文をパソコンで捻くり出しているものの、その電力消費量を考えるなら書かぬが第一、どうしても発信すべき社会的必要性が高いと誤信・過信するならせめて手書きせよ、との自省の声が頭を横切る。セヤケド、体温超えの猛暑日でも団扇で辛抱しテンネンヤンカ、堪忍して一ナ、プラスチックの消しゴム津山ほど造るよりはマシヤンカと別の自分の言い訳も聞こえる。

まあそんなオマエのショーモナイ繰り言どうでもエエケド、遙かアフリカの沖で獲られたエビなんぞを喰らいながら鳥滸がましくも「倫理」云々とは聞いて呆れる。てめえちったあ恥を知れ！

嗚呼やっぱり支離滅裂だ。それにしても何もかもが酷い「近況」です。

（2007.08.17 記）

建設産業界における人材育成について

名譽教授 松井 保

技術者の人材育成を広義に考えれば、優秀な人材の確保と技術継承からなると考えている。バブル崩壊後から現在までの約10年間における建設産業界では、これらの両者において、いろいろと問題を抱えている状況にあるように思われる。この機会に、建設産業界における人材育成について考えてみよう。

いよいよ団塊の世代が定年退職する時期に向かっている。この世代は、建設産業界における優秀な人材の供給源である。その理由はいくつか挙げられようが、昭和38年に完成した黒四ダムをテーマにした映画「黒部の太陽」による効果が大きい。また、その後の列島改造や高度成長期に向けて、将来への夢が大きく膨らんでいた時期でもあった。当時、構築工学科は、工学部の入学試験における最低点が最も高い学科の一つであり、優秀な人材が数多く入学した。

一般に、工学の一分野において、新卒の22歳から定年の60歳程度までの約40年の技術者が現役であると考えて、その間に優秀な世代のピークが一つあると、その工学分野は大いに栄えて安泰であると言われている。最近の約40年間の建設産業界では、団塊の世代がそのピークの役割を果たし、バブル崩壊後の約10年間を除けば、団塊の世代が建設産業界の発展に大いに寄与したと言っても過言ではない。しかし、ここ数年も経たないうちに、団塊の世代によるピークが現役から去ろうとしており、建設産業界では、次の新しいピークを必要としている状況であろう。

バブル崩壊後の建設産業界は、空白の10年と言ってもいいほど“待ちの姿勢”で対応してきたように思われる。やっと、ここ2年ほどの間に大きな変化が起こりつつある。この7月には、建設産業研究会の「建設産業政策2007—大転換期の構造改革」(大成出版社)が出版され、建設産業界の現状分析、過渡期の課題、今後のビジョンが述べられている。しかし、これが実効を挙げ、建設産業界を若者に魅力ある産業界に脱皮させ、次世代を担う優秀な人材が確保されるようになるまでには、今しばらくの時間を要するであろう。上述したような優秀な世代の新しいピークを確保するという視点での早急な対応が求められる。

一方、建設産業の高度成長期を支えた多種多様な技術の多くは、団塊の世代を含む50歳前後から上の世代に蓄積されている。このような世界に誇れる建設技術を30歳代より若い世代に技術継承することは、非常に重要な課題であろう。しかし、この技術継承の現状は、いくつかの理由が挙げられようが、スマートに行われている状況にはない。この状況は何も建設産業界だけに限ったことではなく、ほとんどの分野の産業界でも生じている。その最大の理由はジェネレーションギャップであろう。すなわち、“一所懸命頑張って優秀な技術力を身につければ、将来は社会に大いに貢献できると信じて努力した世代”と“現状に満足して、あまり頑張らずにスマートに楽しく過ごそうと考えている世代”との間のギャップである。

その結果、若い世代の技術者は、技術の本質を理解できずに、マニュアルに基づいて全てを処理しようとしがちになる。一般に、マニュアルには全てが書かれているのではなく、ある技術的常識の上に立つて書かれているので、その技術的常識が十分でないままに単純にマニュアルを用いると、大失敗に繋がるケースが考えられる。最近、今まで考えられない大事故が各分野の産業界で発生しているが、このことがそれらの原因になっているのではないかと憂慮している。建設産業界においても、このような状況を少しでも減らすために、シニア世代から若い世代への技術継承は喫緊の課題であり、そのための創意工夫が求められる。

「進化」とは、何でしょう

名譽教授 柏 原 士 郎

あるレストランのトイレに入った時です。ドアを開けた瞬間に便器の蓋が自動的にパカッと開いたのです。一瞬、ドキッとしたが、ああ、これが今日話しに出ていたトイレだなあと、合点がいきました。実は当日は、ある研究会でシンポジウムを企画し、テーマを「住教育」とすることを決め、内容を話し合ったのです。当然のことですが、戦前の家庭での住教育、過去から引き継がれてきた様々なマナーが、戦後の核家族化により失われている、といった話しが出ました。メンバーは住宅メーカー、ゼネコン、住宅設備メーカー、エネルギー関連会社の方々で、それぞれの立場から興味深い話しが出ました。

ある衛生機器メーカーの方から最近のトイレにまつわる話しが紹介されました。田舎のお祖父ちゃんの家にいった孫が、大便の後流さずに出て来たというのです。日常的に全自動化されたトイレに慣れた子供には、当然のことかもしれません。お尻を紙で拭き、水で流し、蓋を閉め、部屋の電気を消し、ドアを閉めて出てくるといった一連の行動は全部自動化され、自動化されていない環境に遭遇すると対応出来ないのも当然でしょう。この話を聞いた時、以前、東孝光さんが住宅の設計に際し、子供室にドアチェックの設置を要望されたが、ドアを閉めるマナーを身に付けることを重視して、あえて付けなかつたという記事を読んだことを思い出しました。トイレだけでなく、あらゆる生活環境において、利便性、快適性を限りなく追求することが善とする現代社会には意外な盲点があるようにも思えます。「利便・快適」、「健康」、「安全」は環境計画の重要なキーワードです。自動車に頼った生活は便利で快適ですが、人間の身体能力を弱くするなど、利便性・快適性と健康は矛盾することになります。

かつて「聖」も「俗」も廃したニュータウンが批判されたことがあります。例の「酒鬼薔薇事件」が、あまりにも均質で清潔すぎる環境と何処かで結びつくのではないかという指摘です。その真偽の判断は容易ではありませんが、生活環境のあり方を再考するヒントを与えていくように思えます。環境計画における免疫学の必要性です。

免疫学の視点から考えると「安全性」についても再考が必要でしょう。これも古い話になりますが、大阪市の南港ポートタウンでのノーカーゾーンの試みは、安全とは何かを考えさせられます。4万人規模の住宅地に一切自家用車を入れさせず、安全な環境を形成しようという計画は注目をあびました。たしかに、安全で快適な環境が生まれましたが、環境評価調査で、「信号のない環境では子供が交通ルールを学べず心配だ」という意外な回答が返ってきました。要するに、現代社会で生き抜くためには適度な危険を避ける能力が必要とされるということでしょう。小刀で鉛筆を削れない子供の例はよく引き合いに出されますが、「安全性」の問題もその本質をもう少し考える必要があるようです。

失敗学の畠村洋太郎さんは「技術的に危険を取り除くと、今度は人間が危険を予測する感度が鈍る」といっています。より便利で快適に、より安全にというスローガンのもとに人間の社会は一見限りなく「進化」しているようですが、案外それは錯覚かもしれません。遺伝学の柳澤嘉一郎さんによると「単純な体制の細菌やアメーバーも含めて、いま地球上に生き残っている生物はすべて、充分に進化しているといえる。ヒトは主に体制を複雑にする方向に進化してきた。が、細菌やアメーバーは環境への適応という方向へ進化しているのだ」と。

私には「体制を複雑にする方向」へ進化する人間よりも、「環境への適応という方向」へ進化する細菌やアメーバーの方に最終的には軍配が上がるようと思えてならないのですが、いかがでしょうか。

ローマ字には気をつけて

名譽教授 橋 英三郎

「プロフェッサー テイキベイナ」司会者からの言葉が私にはこう聞こえた。隣の席の金多先生（現京大名誉教授）が「橋さんのことですよ」と教えてくれたので慌てて演壇に上がった。慌てたのは会議の発表順や時間が大幅に変更されてしまったせいもある。アテネで開かれたヨーロッパ地震工学会議（1982）で当時助手であった私は、どのようにしゃべったかは覚えていないが、ギリシャ語の同時通訳の女性が機関銃のようにしゃべっていた記憶が残っている。ところで発音について一つの疑問は、医師であり宣教師でもあったヘボン博士が提唱したローマ字についてである。私は小学生の頃、漠然と英語はローマ字のようなものだろうと高を括っていた。中学になって、英語の時間に name はナメでなく make はマケでないことにクションとなつたが、そんなものと開き直り、特に気にもかけずに過ごしてきた。英語では「a」は「ア」だけではなく文字通り「エイ」と読む場合も多い。会議のときの司会者は Tachibana をどう読むか迷い結局 テイキベイナとなつたのであろう。

ところで、ローマ字読みは、ローマ帝国やバチカンや、ひいてはラテン語との関係が深い。研究社の羅和辞典にもラテン語の発音はヘボン式ローマ字の発音にほとんど等しいとある。前述の「発音について一つの疑問」というのは、当時、古語になりつつあったラテン語読みに似せたヘボン式ローマ字が何ゆえに日本で採用されたのかという疑問である。（阪大の創造工学センター長のとき配布パンフレットの名前を創世記の“無からの創造：Creatio ex nihilo”から Creatio としたのでラテン語の悪口を言うのは後ろめたいが）もしかしたらヘボン博士はバチカンの僧侶の常用語であるラテン語の素養を日本人にも植えつけようとしたのだろうか。一般に布教活動は善意に基づいているのであろうが、時として植民地獲得の布石ともなってきた。一神教は互いに妥協点は少なく、長い争いも続く。彼らにとつたら平安神宮や本願寺や禅寺に賽銭を投げ入れるような輩はよほど無節操にみえるはずだ。しかし、逆に、あまりにも熱心な一神教の布教活動を見るとき、その背景に人間のもつ本能的な支配欲もあるよう思えてしまう。ニーチェは、幼児が「そこは僕が日向ぼっこする場所だよ」という言葉に人間の支配欲を見出した。理路整然としたタテマエのもとでの支配領域の拡大は世の常であり力関係で決まっていく。しかし、そこはよくしたもので、拡大には内部での結束強化が必要となり、ハレモノやタブーが増え、それは次第に若者にとっての閉塞感を生み、生きの良い若者が消え、やがて組織は壊死していくことにもなる。

話が逸れたが、ともあれ、ワシントン大学からの電話で最後に「ケイト教授に宜しく」と伝言されたときケイト教授は船舶海洋工学の加藤教授のことだと分かる程度にはなつた。

良かれ悪しかれ、ヘボン博士のローマ字表記やローマ字発音が日本人の英語に妙な影響を及ぼしているような気がする。ただしそれは、私の英語下手の責任転嫁かも知れない。今でも外国で満員電車から降りるときは「揚げ豆腐！」と叫んでいるくらいで、ちゃんとした英語発音にはからつきし自信がないのである。

（当方この1年間、愚図の大忙しで、つくばで行った「置くだけ免震」の振動実験が所定の成果を得た以外にはこれといった成果もなく、あっという間に過ぎました。来年を期したいと思っています。会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。）

(略)
第1回
講演会

今年はこの一言メッセージとします。福井工大の勤めも終えて既に一年半、“自由の身(?)”であることの開放感を味わっております。「私学とは、いろいろな“悟り”を開く場でもある」と、後から来られた松井保先生に、先輩面よろしくお話しした通り、別のいろいろな現実をより広く体験することができました。それが今の生活にも生かされていることを実感しています。

さて、“開放”された筈ではありますが、実のところ“week day”的連続状態となっております。昨年も書きましたように、NOP 法人の理事長、耐震診断の審査委員長、”適判“の監視委員長、裁判の鑑定、判定等のほか、日中建築構造技術交流会の名誉会長として2年に一回は中国行き（昨年は重慶、来年はオリンピック後の北京）、そして今年から日本コンクリート工学協会の中に、ピロティー構造を soft-story 構造とする研究委員会を立ち上げました。その他、いくつかの技術開発をやっておりますが、建築学会のゴルフ同好会会長は、都立大の西川孝夫先生にお願いしました。この春の阪大の“阪工会”コンペでは計らずも優勝したものの、腕の“下り坂”はどうしようもなく、その下り勾配を少しでも小さく、いや上向きとする方法は無いものかと思案、努力中、といった所です。

名譽教授 鈴木 計夫

大阪大学退官後、福井工業大学の新しい環境に順応すべく、脳が相当活性化しましたが、約3年半経過し、現在は定常状態になっています。福井へのドライブ中のリラックスタイム+クラシックアワーでは、約100枚シリーズのCDの3/4をすでに鑑賞しました。

5月には、済州大学で行われた日韓ジョイントセミナーで講演をしてきましたが、出発前の無理がたって、少々トラブルに見舞われました。

また、7月初めの Lisbon の ISOPE 会議では、会長としての役割を無事終えることができました。日本からも数多く参加いただきましたが、全参加者が 950 名を超えて過去最高の盛況振りでした。お蔭様で、会長として大いに満足しております。

会議後、ポルトガルの伝統的な山村であるモンサント、マルヴァオン、モンサラシュ、世界遺産のシントラ、ポートワインの里ポルトなどを訪れ、約 2000 km のドライブを楽しんできました。

名譽教授 松井 保

このところ、銀行・郵便局などの手続きの際に、名前の文字に悩まされることが多くなりました。私は第二次大戦後、小学高学年の頃から脇山廣三の文字を用いていましたが、戸籍の正式な名前は脇山廣三です。ところが、平成 3 ~ 6 年の間は、役所で俗字は使わないことになり、一時的に脇山廣三にされていて、同じ戸籍謄本上に 2 種類記載されている状態であることがわかりました。

インターネットで文字の JIS コードなどいろいろ調べたのですが、まだ、すっきりとした流れがつかめていません。

それで学業名・ペンネーム：脇山廣三

正式戸籍名 : 脇山廣三

パソコン戸籍名 : 脇山廣三

とでも決めておこうと考えています。

名譽教授 脇山 広三



《卒業 50 年》 卒業して 50 年

岩本 樹雄 (C57)



10 年一昔という書き出しでこの欄に投稿してから、もう何年経ったろう。卒業後二分の一世紀を過ごした訳で、我ながらびっくりしているこの頃である。

例によって卒業 50 周年とて、この秋に「ターミナル開発と緑化」という新しいテーマに取り組んだ「なんばパークス」を見学して、大阪中ノ島のホテルで一泊して懇親を持った。

我々が卒業した頃は、不景気でかなりの就職難であった。土木コースの 10 名は、官公署 3、電鉄 2、建設会社 2、不動産会社 1、産業機械 1、石油会社 1 という顔ぶれであった。同じ教室で学んだ建築系は 30 名で、最近まで 4 割近く亡くなっている、生存率 100% と自慢していた土木系もとうとう昨夏一人亡くなっている 90% となってしまった。

私は南海電鉄に就職した。大阪市交通局に入った H 君と共に鉄道関係に就職したのは 10 名中 3 名を数えることになった。若き鉄道マンとして「我々が中堅になる頃は、国鉄環状線を軸に大阪鉄道機関か近畿圏鉄道機関などに大きく合併がするだろうな」と議論をしていたが、国鉄の J R 化とともに当時の思いは実現していない。

電鉄に入社して、一年間の全社的見習いで、駅員からスタートして車掌・運転手・バスの車掌・技術現場体験を経て、線路のメンテナンスの現場長を務めた。以後 30 数年間は建設部門に在籍して殆ど鉄道高架を担当した。この間経営の一端を担って他の建設部門も担当した。中でも自分ながら頑張ったと思うし又楽しかったのは、高層ホテルの建設であった。構築工学科を卒業した最大の利点を生かし、建築面での色々なアドバイスを同級生や先輩から頂いた。又、世紀の大プロジェクトである「関西国際空港」へのアクセスとして泉佐野駅周辺の高架化と空港新線の建設も、困難かつやりがいのある仕事であった。

在職 44 年間の内、37 年間建設に携わってきて自分の担当してきた建設に従事した社員に、また自分自身にも一件の労災事故もなかったことは運が良かったと思うと同時に環境整備がうまく出来たと自画自賛している。

在職終盤は常任監査役として 6 年間務め、計 44 年間同じ会社でお世話になつてリタイアした。

下手な趣味事が多くて、何を中心に毎日がサンデーを過ごすかと考える間もなく、多忙な時間を過ごす羽目になっている。まず、リタイア後の家人との約束で何か一つでいいから、家事を担当することになり、洗濯を略全面的に引き受けている。いかに晴れることの嬉しいことかを実感している毎日である。

いきなり市民活動と言っても、素地もなければ仲間もいないので、家人が先行していた 大阪府老人大学で一年間歴史考古学を学び、引き続き大阪府のシルバーアドバイザー養成講座を一年間受講した。今までにない友人、知人が沢山作れたが、中でも不思議なご縁で在職中議論を闘わした南海近隣会社のメンバーと机を並べて学んだり、同じく在職中お世話になった官公署の人達とめぐり合ったことは望外の両学舎での成果であった。

数年前からは、松井保先生が代表者である C V V なるボランティアグループに属しながら、政令都市になった堺市高齢福祉課から補助を得て、「どぼくおもしろクラブ 堺」なるグループを今年度から立ち上げた。昨今の土木・

建築に対する不名誉な社会現象を少しでも減らし、両部門の大事さを 市民レベルで P Rしようと 10 数名のメンバーで活動している。ぜひ堺市及び周辺の同窓の方々で、これらに興味のある方はご連絡を頂いたいものである。

最後に私の平均的な一日の行動を記して、これからは毎日がサンデーになられる方のモデル、いや反面教師にしていただきたい。

朝（休日以外）

6 時 15 分起床、6 時 30 分孫二人（小学 2 年生と保育園年長さん）来宅、7 時 15 分小学 2 年生の朝食対応、7 時 40 分近所まで登校付き添い、

8 時 15 分年長さんの朝食対応、9 時登園、 やっとマイ時間

夕方（休日以外）

4 時～5 時 孫 4 人（上記プラス小学 6 年と 4 年）来宅後、夏期は風呂入れ

6 時～7 時 孫 4 人と我々夫婦 2 人計 6 名の夕食 その後宿題を見たり、本読みなど。

8 時 30 分 上記二人帰宅 あと二人 10 時過ぎ帰宅

10 時～ マイ時間 就寝 12 時頃

（あまりにプライベイトな文章なので家人は投稿しないでと言っているが）

《卒業 50 年》

卒業 50 年 四方八方話（よもやまばなし）

秦 洋一郎 (A57)



卒業後、50 周年になったので、記念の会を開催しようという声があり、在阪の有志が集まって準備のため、昼食会を持った。

45 周年の時は、岩本樹雄君の紹介で琵琶湖の畔「京近江」を使わせてもらい、すばらしい眺望、部屋毎の露天風呂、心づくしの料理を味わった。翌日比良ゴルフクラブでプレーを楽しんだ。ついこの間のことのように思い出しが、あれからもう 5 年も過ぎたのかと驚く。

昔使った計算尺が机の引出しの隅に残っている。対数目盛で数が大きくなるほどに間隔が狭くなっている。歳を取る毎に時間の過ぎる感覚がこの計算尺の目盛のようであるのがおもしろい。年月の過ぎるのは、とても早く一世代で出来ることも限られているが、この国には、長い年月を経て受け継がれているものが多い。たとえば、東大寺の大仏は、開眼してから既に 1250 年余りが過ぎているそうだ。このように長く存続するためには、叡智を結集した完成度の高い仕組みがあるのだ。第 218 世華厳宗別当東大寺管長の森本公誠氏のお話を伺うと 東大寺本寺内に 20 ほどの塔頭（たっちゅう）と呼ばれる子寺があり、その塔頭の住職が 3 年毎に管長の選出と各々の塔頭の役割を割り振っているという。

管長は、3 年の任務を終えると長老になり、寺の運営には参画しても再選されない仕組みである。人間の弱さ、人事の大切さを知り尽くした結果であり、1250 年余継続の所以である。

卒業後、50 年間企業社会にあって知らずしらず多くの会社の移り変わりを見たが、自信を持って言えることは、唯一つ「会社の盛衰は、人事によって決まる」ということだ。過去の輝きを失った会社は、枚挙にいとまない。強く印象に残る会社を他意なく挙げるとダイエー、三洋電機、カネボウ、安宅



産業、日立造船などであり、構築会の諸氏に關係の深い建設業界にも数が多い。

産業構造の変化に対応できていないことは、否めないが、長年の歴史の中で温存された同族の発言権の強い人事のなせる業と云えるのではないだろうか。人間社会に昔から貢献し将来ますます重要な我々の業務がなにか斜陽産業のような位置づけをされている。残念なことだ。

20年以前の話になるが、3人の息子たちがそれぞれ成長して職に付くことになった時期が4～5年間続いた。職を決める事になるのだが、私は一切関らず自分で考えさせることにした。ただ、アドバイスとして(1)グローバルなマーケットに通じる商品を作る会社(2)学問や閑閑その他にとらわれず公平な人事をしている会社を選んでみたらとだけ話しておいた。当時は、いわゆるバブル景気の異常な時期で企業側が採用にあたり若い人達を惑わせることが多く見られた。現在、息子達が地味かも知れないが伸び伸びと国内外で営業や技術の仕事に取り組んでいるのを見ると私のアドバイスなどはとっくに彼らは忘れているだろうが、息子たちに対して秘かに誇りにしている。自慢話になってしまって恥ずかしいが、爽やかに生きてくれたらと願っている。

ビジネスの世界を出てから2年余になり、「爽やか」な人や著書に純粹に感動する機会が多くなった。紙数が少なくなってしまったので最近読んだ感動の図書に触れて頂く。

1. 「テムズのあぶく」：武谷牧子氏著（日本経済出版社）・・・第1回日経小説大賞受賞作

大人の恋愛小説 生死をも扱いながら読み終わると元気が出て不思議な爽やかさが強く残る

2. 「山歩きを楽しむ」：玉木重男氏著（新風舎）

小生の高校（奈良女子大付属高等学校）の同級生。京大医学部卒の眼科医。宇和島に住み、医院を経営。忙しく診療に当たっておられるが53歳より登山を始め、国内100名山はもとより200名山を32、300名山を20。四国山80余。イス、中国など72歳の今も続行中。山登りだけでなく時に同行した夫人とのやり取り、山についての感慨が面白くほのぼのと人生の豊かさ爽やかさを感じ取れる。

《卒業40年》

ライフワークは、古事記の研究

芦田 大藏 (C67)

株竹中土木
工事部 部長



社会人生活は、大阪市役所で始まりました。36年間の市役所生活は、主に交通局で過ごしました。市役所を退職後は、株竹中土木大阪本店に勤務しています。

市役所在職中の平成2年から7年まで、広島市に派遣されて、広島新交通アストラムラインの建設に従事しました。目的であったアジア大会に開業をまにあわせ、責務は全うしました。その仕事で全体調整をおこないましたので、土木屋の一つの使命は果たしたと考えました。そこで、今度はまったく畠違いのことをしようと考え、古事記を原文で読んでみたら、それにハマッテしまったのでした。

古事記の原文は中国語と漢字の音で表記する万葉仮名で書いてあり、すべて漢字で表わされた書物です。

漢文式読み方で作る読み下し文は、半数近くの文章が意味不明になっています。中国語と英語の文法が似ていますので、英単語を交える読み方で読んでみることにしました。そうしますと、意味が明瞭なものになりました。

その読み方で読むと、古事記に従って歴史書の編纂を命じる文章を発見しました。調べてみると、日本書紀は古事記の指示に従って書かれています。これで分かったのは、古事記によって、日本の古代史は塗り替えられていたのです。

さらに、女帝で始まる4代の天皇の時代にあったことを、神話にしたとも書いてありました。これは、神話から史実を洗い出すと、実際の歴史が分かることを教えるものです。そこで、神話を調べてみると、史実が分かるヒントが書いてあります。

たとえば、多くの頭と尻尾を持った蛇に食べられようとした美女を、須佐之男命が助ける話が載っています。舞台が出雲の島上でしたから、そこに出向くと、鉄穴流し本場という、砂鉄を採取する設備を見つけました。砂鉄の採取がヒントで、神話の内容が理解できました。それを発展させると、面白い史実に気がつきました。

たかまがはら いざなぎのみこと いざなみのみこと おおのやすまろ
高天原から日本に遣わされた伊邪那岐命と伊邪那美命は、14の島を生みます。この島には、二柱の神の出発点と目的地に、太安万侖の思いが隠されています。

いざなぎのみこと いざなみのみこと よみ
火の神を生んで亡くなった伊邪那美命をたずねて黄泉の国を訪れた伊邪那岐命は、死体を見たと怒った伊邪那美命に殺されそうになりますが、この話は合戦の模様を神話にしていました。

つくしひなた たちばなのおど あわきはら あまでらすおおみかみ つきよみのみこと すさのおのみこと きょうがく
黄泉の国から帰った伊邪那岐命が竺紫日向の橋小門の阿波岐原で禊をするとき、天照大神・月読命と須佐之男命が生まれました。筑紫を竺紫と書いてあることがヒントになっており、阿波岐原の場所が分かるようになっていました。どうせん、場所は特定しました。

すさのおのみこと たかまがは あまでらすおおみかみ
須佐之男命が高天原で大暴れをすると、それに怒った天照大神は岩屋に隠されました。面白い神話のようですが、この話は驚愕の真実を伝えています。

これらの解答と調査の内容を、「技術者の見た「古事記」」芦田大蔵著（新風舎）という本に記してみました。

この表題は、読み下し文を元にしている「文学者」の古事記と、英単語交じりに読んだ「古事記」を対比させる目的でつけました。

この書は、易しい内容で古事記を分かっていただくことを意図して書いていますので、神話の解説のみをおこなっています。解説内容は、実際にあった歴史を語る入口です。本当にあった歴史をまとめるのが次の仕事と、古事記の研究はまだまだ続きます。

拝読ありがとうございました。

《卒業 40 年》

「P D C A で始まり、P D C A で終えたサラリーマン人生 40 年」

前田 孝男 (A67)



この原稿の依頼を頂いた 8 月は、私にとって定年退職する月でもあり、この機会に、私の 40 年を振り返り、報告させて頂きたいと思い、引き受けさせて頂きました。

'67 年に卒業し、2 年間は研修で、病院建設工事現場を始め、瑕疵担当とリニューアル工事の監督でした。夜間工事が主で忙しく、3 年を過ぎた頃に、やっと大阪市の谷町筋道路拡張事業に伴う市街地改造事業である谷町市街地住宅の建設工事に携わることが出来ました。

この現場で、最初に所長から教えて頂いたのが「P D C A」と言う言葉でした。最初は意味も分かりませんでしたが、「P : プランニング」「D : ドウイング」「C : チェギング」「A : アクション」という建設現場で一番大切なキーワードでした。設計図書、工期、請負額から施工図と工程表を作成し、クリティカルパスメソッドで、無理、無駄を省き、工期内に建物を完成させる為に、現場所員全員が共有する文書化システムでした。(暗黙知から形式知へ)

この現場では、杭の載荷試験から建物完成まで担当することが出来、お陰で企業の経営工学も学びました。ただ、施工段階で図面に表示された同等品の中から利益を重視し、安価なものを選び、完成後瑕疵問題で苦労したにがい思い出も教訓として残りました。

'72 年に、家庭の事情で転職を考え、当時の「日本住宅公団」に中途採用で入社しました。

最初に賃貸住宅の経営に携わることができ、土地の購入から、宅地造成、住宅・施設の建設等の計画を担当しました。'75 年に東京九段の本社に転勤し、「P D C A」は、更に都市経営レベルまでになりました。住宅だけのニュータウンに企業を誘致するなど「住み、働き、学び、憩う」をコンセプトに多機能都市と呼ばれる街づくりに方向転換、私の担当した住宅も成熟化社会、女性の社会進出、環境共生をコンセプトに、居住者の価値観を大切に、ライフスタイル研究に着手、ニーズの多様化に対応する住宅・都市経営へ転換を果たしました。

2000 年には都市基盤整備公団(現 U R 都市機構)を退職、㈱関西都市居住サービスに入社し、ニュータウン内のショッピングセンター、駅前の再開発商業施設の経営に携わり、管理型の経営からお客様のニーズを先取りした施設運営型経営への転換に取組みました。

特に監査役に就任した昨年は、会社経営が商法から会社法に変わり、「内部統制システム」の体制整備が義務付けられ、リスク管理、コンプライアンス等を中心に企業運営システムを再構築しました。会社法を読んで、内部統制システムとは、即ち責任と権限に基づく「P D C A」そのものであると考え、社長自ら定めた「会社の経営理念」に則り、目標を設定し、会社運営の工程表を作成しました。内部統制システムは、変化に応じて、計画変更もし、その達成度をチェックする。達成すれば責任を果たしたと認知され、達成できなければその責任を取らなければならないという厳しいシステムです。さらに C S R (企業の社会的責任) も求められ、コミュニティビジネスや環境問題等社会貢献に取組む目標も掲げました。(注)

社会の基盤整備を研究する大阪大学地球総合工学科にも、コンパクトシティ(アーバンティッシュ論)等の経営・工学システムに取組んで、ソフト・

ややくこの頃、久々に静かに、アーヴィングの本一枚で下手やさしく、少しでもうけた感じで、心から感謝の言葉を述べたい。これまでトランプの手帳やカレンダーは、いつも私に支えられてきました。

この手帳は、常に私の人生を支えてくれました。これからも、この手帳と一緒に、新しい旅を歩んでいきたいと思います。

ハードの両面から、持続的（サステナビリティ）社会に貢献する学科であってほしいと会員の一人として願っています。

最後に、構築会の運営をして頂いている各学科の先生方、関係者の皆様、並びに役員の皆様に厚く御礼を申し上げますとともに構築会のネットワークの更なる発展と構築会会員の皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げまして、私の報告とさせて頂きます。

(注)当社ショッピングセンターのエコール・マミ(奈良真美が丘)では、ニュータウンの歴史探訪とまちのクリーン作戦を、畿央大学と連携して実施中です。

《卒業 30 年》

マイコンからパーソナルな 30 年

蓮輪 賢治 (C77)

株大林組
土木本部 本部長室



私が大学を卒業した頃はようやく電卓が普及し始めたときである。表示は液晶ではなく蛍光表示管だった。また電池も単三電池で、大きさは現場服の胸ポケットにかろうじて入るくらいの大きさであった。関数電卓もあったが、高価でなかなか手に入れるのに勇気がいった。電卓はまたたく間に巷に普及し文房具のひとつになった。

70年代後半は、マイコンが、世に送り出された時期もある。アップルコンピューターがはしりで、アップルIIという機種であった。私が最初に触ったマイコンは、このアップルIIである。マイコンの講習会がデパートで開かれ、その講習会に参加したのを覚えている。ちなみに国産の製品では、NECのPC8001とシャープのMZ-80が圧倒的な人気であったと記憶する。

80年代に入り、NECからPC8801が発売された。我が家初代パソコンは、この機種である。言語は、BASICであった。当時の自分にとっては、本体が高価(228,000円と、当時の月俸よりも高かった)であったため、モニターはグリーンモニターで、カラーCRTは買えなかった。外部記憶装置は、カセットテープレコーダーで、簡単なゲームもテープでロードしていた。今から思えば、のんびりした時代であった。

さて、80年代は、パソコンでワープロ機能を使うよりもワープロ専用機を使用する方が、遙かに安く文字が綺麗で効率的であった。我が家もPanasonic製のワープロを買って、たまに使っていた。

80年代はじめ、表計算ソフトの主流はMultiplanであった。80年半ばより90年代はじめには、表計算ソフトではロータス1-2-3が台頭し、ワープロソフトでは、一太郎が台頭した。90年代になるとパソコンの高性能化、ワープロソフトの高機能化、プリンタのカラー化高品質化によりワープロ専用機の優位性は急速に薄れ、90年代後半には世の中からワープロ専用機が消えていった。91年にWindows3.0が発売され、Excel/Wordが日本に上陸し、ついにWindowsの時代が到来した。

90年代末には我が家ワープロ専用機もお蔵入りし、Windows95の発売を契機に、我が家も新しいパソコン(2代目)を購入した。しかし、パソコンが活躍するのは、年賀状を作るときくらいで、あとは机の片隅で眠っていた。

2000年代に入り、世の中は、あつと言う間にインターネットの時代に入った。光通信網の整備とあいまって、我が家でも漸くインターネット環境が整つ



た。あわせて3代目のパソコン(Windows XP)を導入した。娘がフィンランドに留学したときも、毎日メールでやりとりした。息子もインターネットで就職情報をを集めている。家内も友人とメールで情報交換している。かくいう私は、本年7月から東京単身赴任。単身寮でインターネットをと、現在機種を選定中である。80年にマイコンを買ったときより安い金額ですべて揃う。すごい時代になった。

しかし、いくら世の中便利になろうとも、人には、目と目を合わせてのコミュニケーションが大切だと思う。私にとっても、諸先輩・後輩・同級生と共有できる時間が貴重であり、また、家族が集う団欒が一番楽しみである。

(出来うる限り、週末には関西に帰ろうと考えながら……)

《卒業30年》

『卒業約30年』 73会 全国大会

高井 正行 (A77)

JFEスチール㈱
プロジェクト営業部長



私達の構築会同窓会は、『73会』と呼んでいます。通常は卒業年次ですが、入学年次(73年)で集まっています。

そもそも、この会は、急逝された浜本君の葬儀に参列した時、誰からともなく一度集まろうということになり、東京で第1回を行ったと記憶しています。その後、大阪でも行うようになり、最近では、東京と大阪で年1回づつくらいの頻度で続けています。

その後は、大病された人もいますが、誰ひとり欠けることなく、今年は、私達もほぼ卒業30年になりましたので、3月はじめに、吉川カントリでのゴルフ、麻雀と宴会は有馬温泉でと、一泊二日で集まりました。

代表幹事は、昔から出席番号1番の安達君、暫定幹事は有馬温泉に詳しい片山君、それにゴルフ幹事で藤丸君が世話役になり、総勢22名で行いました。

当然50歳を過ぎた男ばかりが集まった会ですが、『阪神淡路大震災』『メタボリック』『ダイエット』『単身赴任』『子育て』『健康保持』……それなりに経験豊かで、子育てもほぼ終了。これから的人生設計が主な話題で、夜が更けるのを忘れて盛り上りました。

最近では、昨日逢った人の名前も覚束なくなってきたが、卒業以来の再会にもかかわらず、顔も名前も覚えているのが、不思議ありました。

次回の全国大会も、皆元気で集まれることを約束しての散会となりました。



有馬温泉『THE MAPLE』ロビーにて

《卒業 20 年》

本州最南端の町から

太田 和良 (C87)

和歌山県東牟婁振興局串本建設部
道路課長



私は「土木」という言葉に愛着をもって、この道を選びました。土と木を基本とした社会基盤、そしてそこを貫いて渾々と流れる水の力を連想させる、いかにも日本的な言葉だと感じています。

卒業して早いもので 20 年となりました。研究室は室田研で、当時、河口部の塩水くさびを研究しましたが、現在は本州最南端の町「和歌山県串本町」で、地方振興局建設部の道路課長として、3 グループ 14 人の部下を抱え、日々奮闘しております。

串本といえば、東南海・南海地震が発生した場合、市街地全域が津波に飲み込まれるというシミュレーション結果がでています。私の職場も津波被害を受けることとなります。ちなみに串本町では役場も警察も消防も想定津波浸水区域の中にあります。もともと海とともに生活を営む土地柄であるので、ある程度仕方のない面があるのかも知れません。

実は前の職場は県土整備部地震防災担当でした。平成 15 年度に作られたチームで、国交省河川局のラインでもなく、内閣府でもなく、消防庁でもなく、県独自の考え方で全く手探り状態の中、業務にあたりました。その当時から今日までの 5 年間に私が感じ、得たものを以下述べたいと思います。後輩の皆様に少しでも役立てていただければ幸いです。

土木にとって防災とは一体何か、防災技術とは何か、その点を明らかにしていくことが災害復旧や消防との違いを明確にすることだと思いました。土木的には治水技術や耐震技術など、想定される外力に対して構造物が耐えられるか、そして町や人を守れるかというところの技術の集合体が防災技術だとする見方もあるかと思います。しかし、地方社会ではこの考え方での防災技術は役に立ちません。なぜなら B/C (費用対便益) によって、外力に対抗するに必要十分な公共投資そのものがはね除けられてしまうからです。

失敗学で有名な機械工学の畠村洋太郎先生がその著書の中で、生産が依存する事柄が時代とともに①ハードウェアから②エネルギー、③情報、④知（頭脳活動）へと変化しているとありました。防災に当てはめてみると、①堤防など防災施設の整備、②被災した後のボランティアによるマンパワーへの依存、③情報共有のためのシステム整備とリスクコミュニケーション、現在では一般的にこの第 3 段階まで到達してきたのかと思います。

さて、第 4 段階ですが、私は「コミュニケーション防災」をキーワードに地域ごとの人材育成に力をいれようと考えました。つまり、人材の底上げです。限界集落が孤立したらどうなるか、広域災害によって全国に何十、何百の孤立集落が発生したらどうなるか、まずは自分たちの力でやれることは何かを考えなければいけません。そのときの応用力こそが防災技術と言えるのではないかと考えています。

では応用力とは何か。一言で言えばマネジメント力だと思います。俗にマネジメントとは管理運営システムを構築することのように理解されていますが、私は智をもって活動できる人と環境を育てることだと考えています。ポイントは二つ、一つは知識に日を当てること、二つ目は人も環境も常に変化するという前提に立ち、向上するべく育てることです。

莊子の言葉に「無用の用」というものがあります。現代社会において、機能と効率で表現しきれないものを説明するのは非常に難しい課題ですが、地方部では正にそれが要求されます。有能な人材が地方に出て、地方の事情に即したマネジメントに携わって頂けることを期待しています。

《卒業 20 年》

気がつけば卒業 20 年目。そして、これから

芦田 智之 (A87)

(株)日建設計
東京本社設計室 設計主管

《卒業 20 年》

中正の歴史遺産

日本

卒業して 20 年、になるのだそうです。他人事のようですが、実感がありません。20 年後の自分をしっかりとイメージせずになんとなく過ごしてきたからかもしれません。少し反省。

思い返せば、私たちが社会に出た頃とは明らかに世間の様子が変わっていることは確かなようです。社会へ出てすぐ、バブルのころの、上がり続ける土地の価格を根拠に、付加価値と称する有象無象が正当化され、思いつきとしか思えないようなデザインや建築が跋扈したのはついこの間までのこと。「理解できないもの」＝「芸術」として知ったかぶりをしていた人たちも、裸の王様よろしく「純粹なこどもの目」＝「本当はみんなが思っていたこと」に丸裸を暴露され、真に「本当の価値」が問われる時代になったと同時に「本当の価値」そのものは何かが問われる時代になったと思います。

そんな中でこれからのキーワードとして「環境」という概念はますますその重要度を増しているように思います。これは、人が生きるために直接かかり、故に芸術と違って非常にわかりやすく、善し悪しの判断が人によって、文化によってぶれにくい。自然は「善」人工は「悪」といった漠然とした共通認識があるからなのかもしれません。

地球温暖化、異常気象の頻発といった地球規模での不安感が募る中、アルゴアの「不都合な真実」がベストセラーとなり、将来にわたる人類の生きる環境をいかに持続させるかが世界的な関心事となっています。建築においても、どちらかといえば、自身のメリットに主眼を置いた「省エネルギー」から、もっと視野を広げた「環境負荷低減」へ、また、環境としての持続可能性「サステナブル」へ、そのテーマが移行しつつあります。建築計画においても民間開発で「経済性」のみならず、「環境性能」が意思決定のパラメータの一つとして話題となること自体、大きなパラダイムシフトを予感させます。

しかしながら、企業ぐるみの不祥事が珍しくない昨今にあって、企業活動におけるコンプライアンスが最重要視され、「環境」というキーワードが「営利」のみではない「社会貢献」としての企業姿勢を世間に示すための「お題目」になっているとすれば残念ですし、この「環境」ということばが「絶対正義」となり、異を唱えること 자체がタブーとなるようになっても危険だと思います。

「あなたが昨日、クーラーをつけっぱなしで寝たから、いつか南極の氷はさらに解け出ことになりますよ」といわれても実感がないばかりか、居心地の悪い罪悪感、さもなければ、靈感商法にでもひっかかったような違和感を覚えるに違いありません。しかしながら、子供たちの代まで今世紀の刹那の快楽を追求したツケが回ることの無いよう、私自身を含め、建築設計を生業とするものは、単なる原始回帰に陥ることのない、正しい知識を背景とした発想と提案を行うことが今後ますます重要視されることと思います。

先日、携帯電話で行き先までの経路を検索すると、「早い・安い・楽」とともに、CO₂排出量が表示され、驚きました。「ちょっと高くて遠回りだけど、CO₂抑制のためにこっちでいくか」なんて、若き女性や、メタボな中年のカロリーコントロールよろしく、わたしたちの生活に自然に根付くようになれば、100 年後の地球もそう悲観することもないかもしれませんね。



《卒業 10 年》

子の誕生に改めて思うこと

入江 政安 (C97)

大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学工学専攻助教



原稿の締切日（8月17日）に10周年記念同窓会の下打合せという理由で飲み会を企画していたので、それを待って、その雰囲気を紙面でお伝えしようと思っていました。ところが、当日朝、娘が生まれ、それどころではなくなってしまいました。大学院を出て就職し、結婚した団塊ジュニア同期生は昨年から今年ぐらいがベビーブーム（都合、第3次？）のようで、私のみならず、同期の皆さんも10年経って、生活も価値観も変わったのではないか。子供ができることが分かってからのこの1年弱、世はちょうど年金問題で揺れた時期でした。打ち出される政策（対策？）は高齢化とか年金に係わる政策ばかりで、この本質は少子化ではないのかと強く思うようになったのですが、諸先輩各位はいかがお考えでしょうか。

少子化のことを考えると、つい10年前のバブル崩壊まっただ中、就職氷河期のことを思い出します。例えば、ここ数年では、大阪府の公務員採用数は10～25名程度となっていますが、私たちの代は大阪府も大阪市も若干名と言ったところで、公務員の枠さえほとんどありませんでした。同時に、学校推薦の枠組みも崩壊しはじめた頃です。土木系への就職に関してはおそらく日本一有利と言っても差し支えない阪大土木のことですので、私たちそれぞれには大きな被害とはなりませんでしたが、今の学生の楽観的なところを見ていると、羨ましくも思います。

会社に入りますと（私は1年しかいませんでした）、突然やってきた「成果主義」と終身雇用制度の崩壊です。今の職場でもそうで、教授には任期がありますが、私のような助教（これまでいうところの助手）には任期があります。民間も同じだと思われるかも知れませんが、最初に契約書を交わし、そこに年限が書いてあるので、（少なくとも文面上は）そもそも正社員になれていないうなものです。来週には、この任期の中間評価の面接があります。若い生きの良い人材をどんどん採用する良い制度のように見えますが、まだまだ始まったばかりで、評価基準も契約更新の目安も何もないで、不安がないわけではありません。まあ、このような状況ですので、よほど研究好きか、よほど先を読まない楽天家（私の場合はこちら）でなければ、大学教員も勤まらなくなっていました。アメリカのような人材の流動性が高い社会ではない日本の社会において、皆様の会社の人事制度は若手が安心して子供を生める環境でしょうか。

そのような漠然とした不安が確たるものにはならないのは、それでも比較的恵まれた10年であったからでしょうか。身近に戦争があったわけでもなく、格差社会とはいえ、明日をも知れぬ困窮というわけではない、激しい時代の変化があった訳ではないのかも知れません。私自身も、会社勤めにあっさり見切りをつけ、まだ20代だからゆっくり勉強し直せばいいつもりで、大学院博士後期課程に戻った結果、今度は予期していたとおりドクター就職氷河期に直面しましたが、博士後期課程修了後すぐに現職に恵まれました。先週わが娘を生んでくれた妻は10年以上のつきあいになりました。仕事の方では、決して出来がいい方とは思いませんが、様々な場面でまれにありがたいお言葉を頂くなかで、自分の仕事をほんのわずかながら客観的に評価できるようになってきました。戦後レジュームの脱却という言葉で表せるように、社会

全体がある種違う時代に向き出したことに光明を見出しています。

私たち就職氷河期世代（失礼にも、朝日新聞はこれを“ロストジェネレーション”と呼んだ）は、上の世代が謳歌したバブルの“つけ”の方だけを一緒にになって払い、ものによっては単なる制度改変や失策でしかない“構造改革”的波を受け、今なお「団塊世代の退職による需要増も就職氷河期世代の救済にはつながらない」という状況で、これから年金受給される親世代の皆様の老後を支えていかなければなりません。それでも、様々な問題点を抱え、不況だ、格差社会だといいながら、平和に繁栄し続けるこの国で、私たちを育ててもらいましたから、応分の貢献をしていく所存です。一人ひとりが少しづつ努力をすれば、きっと子・孫の世代の幸せになるはずであろうし、そのためには働いていきたいです。子は国の宝ですから。

末筆ながら、構築会員各位のご繁栄と、なによりご健康をお祈り申し上げます。

《卒業10年》

愛校心のようなもの

西岡 絵美子（A97）

日本学術振興会
特別研究員



学部卒業から10年、修士修了から8年が経ちました。最近、今更ながら「愛校心のようなもの」が芽生えてきたと感じことがあります。そこで「10年目の雑感」として、私の「愛校心のようなもの」についてお話ししたいと思います。

「愛校心」とはいったい何なのでしょうか。辞書には「愛校：自分の出身校または在学する学校を愛すること（大辞林）」とあります。なんだか漠然としていますが、そもそも愛し方や思い方は人や対象により千差万別でしょうから、定義自体が漠然とするのも当然です。

では、「愛校心」はどのようにしてつくられるものなのでしょうか。近年、愛校心を育てようと、建学の精神や自校の歴史を学ぶ自校教育を講義に取り入れる大学が相次いでいるそうです。また、東京六大学野球のように母校を熱狂的に応援することが愛校心を育てるという人もいます。一方、アメリカの大学において大学のロゴ入りのグッズが多くみられるのは、在校生の愛校心をはぐくむためであり、それは卒業後の寄付金集めのための大学の戦略だとの意見もあります。こういった行為や環境が、「愛校心」をつくりあげるのでしょうか。

以下に、私が「愛校心のようなもの」を感じる機会を整理しました。

①阪大出身者に自然と親しみを感じる

初対面の方が阪大出身であると、たとえ在学中に面識がなくとも、親しみを感じることがあります。それは、交渉術における「相手との共通点を探しそれをアピールすることで、親しみを感じさせる」といった作為的なものではなく、自然と得られる感覚です。

②同級生や先輩・後輩に遠慮なく相談ができる

最近、修了以来会っていなかった同級生や先輩・後輩と久しぶりに会う機会が増えてきました。そこでは、思い出話やプライベートなことだけでなく仕事についても話題となり、それぞれがそれぞれの専門性を築きつつあることを実感します。何事も遠慮なく相談できる同級生や先輩・後輩とのネットワークはかけがえのないものです。

③大学で学んだことに影響を受けている自分に気付く

私の出身研究室では、建築の保全計画・安全計画・建築企画などの重要性を唱えています。しかし、正直なところ、在学当時にはピンと来ていなかったことも多く、修了後は何を教わったのかさえ忘れていました。しかし、最近、先生方の教えの重要性と同時に、それが私自身の考えの一部分となっていることに気付くことがあります。つまり、知らず知らずのうちに大学で学んだことに影響を受けているということです。

④阪大に関するニュースが気になる

最近、良くも悪くも阪大に関するニュースを目にすることが多くなったように思います。在学中や修了後しばらくは、特に关心もなく、私にとっては他人事でした。しかし、最近は良いニュースは当然うれしく、悪いニュースも「だめな子ほどかわいい」といった感覚でとらえるようになりました。

以上のことから、今の私の「愛校心のようなもの」は「阪大で出会った人々との関係や学んだことに感謝し、たまに阪大のことを自分のことのよう感じる感覚をもつこと」だといえます。それは、自校教育として教え込まれるもの、スポーツ観戦のように熱狂的な感覚を伴うもの、ロゴ入りグッズのように形式的なものではありません。時間の経過と共にゆっくりとじんわりと感じられるものです。その「愛校心のようなもの」の感じられ方に派手さはなくとも堅実であるところも、「なんだか阪大らしい」と思いませんか。

卒業生の大変革の顔

大卒業生
新規事業開拓部

新規事業
開拓部

「最初はお世話係だった私が、最終的には新規事業開拓部の責任者になりました。この経験が、今では新規事業開拓部の責任者として、また、阪大とつながる活動として、多くの学生が、アントレpreneurとして活躍するためのサポートを行っています。」

たより

31歳のモラトリアム



社会基盤工学コース
博士後期課程1年

谷内 久美子

私は今年の4月1日から博士後期課程の学生になりました。学生という身分になるのは9年ぶりのこと。私の同期のみなさんは職場の中堅どころとして、日々バリバリと仕事をこなしているのではないかと思いますが、私は学生としてのんびり過ごしています。

私が学生に戻る直接のきっかけは、行政の外郭団体の研究員、大学の特任助手と渡り歩いてきた仕事の任期が切れてしまったことにあります。任期が切れてしまえば次に行く場所を探さなければならず、ちょうどよい仕事もなかったので学生に戻ろうと決心しました。直接のきっかけはそんな積極的ではないものでしたが、本来の目的は子どもを育てながら仕事を続けるための武器として博士号がほしいということにあります。この博士号を取ろうという考えは、娘がお腹にいることが分かった3年前から考えていました。

多分、出産・育児というのは、女性なら誰しもが仕事を続けるか止めるかの決断を迫られるできごとではないかと思います。私の場合もそうでした。子どもがお腹にいることが分かった時はとてもとても嬉しかった反面、出産・育児のためには仕事をやめなければならないと思いこんでおり、このままでは社会との繋がりがなくなると思い悩みました。しかし、当時の職場の方や家族の助けにより、仕事を続ける決意ができ、出産後も育児をしながら仕事を続けることができました。ただし、育児をしながら仕事を続けるということは、子どもに負担を強いることもありますし、家族をはじめとした多くの人の協力がないと成り立たないことです。それならば、私自身が仕事にやりがいを感じ、社会をよい方向に持っていく仕事をしないとする意義が薄いのではないかと思い始めました。そのためには、今の中途半端な能力では不十分なので、きちんとした能力を身につけるために博士号をとりたいと思い、今にいたるわけです。

久しぶりの学生生活はなかなか楽しいものです。何か義務があるわけでもないので、何をするのも自由です。ですが、自由というのもなかなか辛いもので、気

がつくと無駄に日々だけが過ぎ去ってしまいます。そこで、日々を引き締めるために2つ工夫をしています。

1つ目の工夫は、研究室の学生を巻き込んで「研究の基礎」の勉強会を行い、今までおざりにしてきた調査の方法・統計等の基礎の部分を積み上げなおしていることです。この勉強会の名目上の目的は、「①学生間の知識・意識の共有。②学生の自主性を伸ばす。③研究遂行するための技術を身につける」としていますが、影の目的は「私の技術向上と知識の整理に他の学生を巻き込む」ことです。この勉強会は学生が交替で講師を務めて月に2回ほど行っており、M1・M2の学生にも「研究に役に立つ」と好評です（多分）。

2つ目の工夫は、研究フィールドに積極的に出かけることです。たまたま縁があって兵庫県佐用町江川地区というところで、住民さんと一緒に過疎部の交通をどうしていくのかということに取組んでいます。この取組みをどのようにして研究として成り立てるのかという大きな課題が解決できていないのですが、地域に入り込み、地域の人々の声に耳を傾け、共に議論するのはとても楽しく、充実しています。地域の人々から「ホルモン焼きうどん」をご馳走になったり、茄子のからし漬けをいただいたり、食に嬉しい私はそれだけで江川地区のことが大好きになりました。（この取組みの経緯をブログにまとめています。興味のある方はご覧になってください→ <http://transportation.cocolog-nifty.com/>）

そんなこんなで、私は今、31歳のモラトリアムを満喫中です。こんな生活を送れるのも心優しい夫の存在があるからこそです。夫をはじめとした周囲のみなさまに謝意を捧げて、この駄文を終わりたいと思います。

● ● ●

近頃の等身大の阪大留学生



建築工学コース
博士後期課程2年

李 華

初めて研究室に入った時、ある同じ留学生の先輩から「博士まで行こうと思うのはとてもいいんですけど、だいぶ長くて、私費なので、生活などいろいろ大変ですよ」と声をかけてくれた。私は躊躇なく、「大丈夫

です。頑張ります」と答えた。

あっという間に5年がすぎた。毎日、あのいつ故障してもおかしくないエレベーターをドキドキしながら使っている。工学部食堂が何か新しいメニューを出してくれると祈る。当時の先輩はもう誰もいなくなつて、いつの間にか自分が研究室の一番先輩になった。振り返ると、確かにいろいろと大変だった。

以前お盆休みのある日、日本人友達と屋間遊んだ後、居酒屋に飲みに行った。目の前に、ある留学生のアルバイトが汗だらけで、あちらこちらに走り回っていた。「休みもなく、あんなに頑張っていて、かわいそうだね」と友達が言った。「いやいや、留学生なら、大概こんな感じだよ」と、何年前の自分を思い出しながら、答えた。

これは来日したばかりの頃。日本語学校の授業も、大学院の受験勉強もあって、さらに週8回のバイトをしていた。肉体労働にまだ慣れていないし、日本語も相当に下手なので、散々先輩に怒られた。でも生活のために、授業料と受験料のために、耐えに耐えることしかできなかった。外食どころか、スーパーで半額じゃない商品は殆ど買わなかった。大学院の受験が終わった日に、初めて松屋に入って焼肉定食を食べた。今のように友達と遊んだり飲んだりするのは想像すらできなかった。

忙しくても、疲れても、いずれ回復することができるが、留学生にとって、一番大きなのは心理上の問題だと、私は思う。親や友達に離れ、異国の地で長い間一人で生活すると殆どの人が孤独を感じるだろう。言語や生活習慣などの問題によって、日本社会になかなか順応できず、また、親に心配かけたくないから、挫折や悩みがあっても殆ど伝えない。そんな状況が長く続くと、ストレスがたくさん溜まって、いったん何かあったら、大変なことになる。自殺した人とか精神的障害になった人などは極端な例だが、多くの人が日本での学業を諦め、帰国してしまった。幸い私は周りの方々に恵まれ、何とか無事にここまでやってきた。

最近研究のために、たくさんの留学生と話し合うことができた。「留学生活はどう思いますか」と聞いたら、もちろんいい話もあるが、暗い話のほうが多い多いようだ。初対面なのに3時間も話が止まらなかった人も、急に泣き出した人もいた。

私は多くの人に對し、慰めてなく、励ました。「留学生活は大変だと最初から覚悟しなければなりません」とか、「若いうちに、夢のために、苦労しなさい」

とか、「いろんな困難を乗り越えたら、きっと立派な人間なりますよ」などの話をしていた。殆どの人は「分かりました。ありがとうございます」と答えてくれたが、そう簡単に理解できるわけがないだろうと、自分の体験でそう思う。この文章を読んでくれる留学生の先輩方々もそう思うのだろう。

「等身大の阪大生」というタイトルで書けと言われたが、勝手に「阪大留学生」に変えてしまった。エキゾチックとまでは言えないけど、ちょっと異色で、うけるかもとベタに思った。留学生について本気に書くなら、丸一冊を埋めてしまうので、文字数もボチボチ達そうというところだから、ここで終了したいと思う。

● ● ●

ターニングポイント



社会基盤工学コース
博士前期課程2年

小山 恵子

5年前、私は大学生になるのが楽しみで仕方ありませんでした。確かに最初の1年は初めてのことだけで充実した毎日を送りました。しかし、2年生からは単調な日々を過ごしていました。4年生になって研究室に配属され、また新しい生活が始まりました。そこで自分の生活を楽しくするのも、つまらなくなるのも自分次第だという当たり前のことを学びました。また、研究の現地調査で中国へ行った際に外国人とのコミュニケーションの難しさ、重要性を知りました。そこで、イアエステの制度で修士1年の夏に海外インターンシップに参加することを決めました。

「ドコニイキタイデスカ?」これがドイツに着いて初めてドイツ人に言われた言葉でした。フランクフルト空港から滞在先のカイザースラウテルンまで電車で移動するのに、切符を購入するメモを取り出そうとした時でした。幸運なことに日本語で切符を買って難なく目的地に辿り着くことができました。しかし旅はまだ始まったばかり。それから2ヶ月はいろいろなことがありました。その間にあったターニングポイントを紹介したいと思います。

世界中の学生がイアエステを利用して海外インターンシップに参加してきます。それぞれの国でイアエス

テがイベント・旅行を格安で企画してくれて、希望すれば参加することができます。そのイベントの1つに、研修が始まって1ヶ月経とうとした頃に参加しました。船上でのパーティーを目当てに、同じ研修先の友人と参加したのですが、いってみると3日間ほとんどワークショップでした。ワークショップでは順番に自分の意見をいう形式だったので、とにかく何か発言しなければならない状況でした。私は他の国からの研修生に比べて1番英語が話せないことを、それまでの1ヶ月でよく身にしみてわかっていたのでかなり苦痛でしたし、苦労しました。その時がホームシックのピークだったと思います。さらに、休憩中もあまりしゃべらなかったので、shyでsilentな女の子だと言われてしまふのです。相当ショックでした。どうにかしてそのイメージを少しでも拭おうと考えました。ワークショップ最後のまとめのプレゼンテーションでは積極的に壇上に立ち、念願の船上パーティーでは初対面とか関係なくいろいろな人と接しました。そして最終的に完全にみんなの仲間として溶け込むことができ、また今でも連絡をとりあう友達ができました。このワークショップイベントをきっかけに私は発言が増え、その後の研修生活を心から楽しむことができました。

生活を楽しくするのもつまらなくなるのも自分次第ということを再び実感しました。また、自分がどん底にいるとき感じることこそ一皮剥けるチャンスだということに気づきました。今はドイツでのワークショップでどん底を体験したと思っていますが、これから長い人生を歩むなかで、特に来年からは社会人になるので、想像できないどん底が待っているかもしれません。1つずつ確実に乗り越えて、たくましく生きていきたいと思います。



日々の生活について



社会基盤工学コース
博士前期課程1年

本村 信一郎

大阪大学に入学して早5年目、研究室での生活は2年目ということで、私の今の日々の生活について書かせていただこうと思います。

大学院になると授業のほとんどが選択科目となり、学部生のころより自分の好きな授業、興味を持った授業をより多く受けることができます。私は、M1の前期は、自分の専攻分野だけでなく、他の専攻分野の授業も受けました。グループワークやパワーポイントを用いてのプレゼンテーションなどを多く行いました。グループワークでは、話し合いや作業の進め方に苦労したり、共同作業ということでグループワークの難しさを感じたりしました。パワーポイントの発表では、授業だけでなく研究などいろいろな場面で先生方から、発表において重要なこと、気をつけることなどを教えてもらっています。多くのことを勉強させていただいている。人前で話すのは苦手な私ですが、それも経験を積み重ねていくことで改善されていくと考えており、良い経験をさせてもらっています。

研究室ではゼミがありますが、その他にも学生同士で定期的に勉強会というものを行っています。各回でテーマが決められており、担当の学生が皆の前で発表して説明していく形式です。皆に説明する、教えるということは、事前に相当勉強しなければなりません。しかし、人に教えることでまた自分の理解も深まる感を感じています。質問なども学生同士ということもあって、気軽にできることも勉強会のいいところの一つであると思っています。そういうわけで、研究室での学生同士の勉強会は、とても有意義で、これからも継続してやっていくべきだと思っています。また、研究室に配属されるようになってからは、シンポジウムやセミナー、ワークショップなどに参加する機会が増えました。新しい知識を得ることができ、いろいろな立場にある人の考え方や意見を聞くことができ、大変勉強になります。セミナー等には積極的に参加していくべきであると感じています。

研究室の生活とはまた異なるのですが、私は大学に

入ってからテニスサークルに入っています。M1となるともうOBであり、大学2,3回生のころとするとテニスをする時間も減りました。しかし今となっても、時々サークルやテニスコートに行ってテニスをして楽しんでいます。夏場にテニスコートに行って真っ黒に日焼けした後輩たちを見ると、昔の自分を思い出したりして、懐かしくなるときもあります。毎日研究室でパソコンに向かったり、いすに座って机に向かったりしている生活を送っていて、時々テニスなどして運動をすると、とても楽しく良い気分転換となります。スポーツをすること、体を動かすことの楽しさを実感したりしています。

研究室では、先生方をはじめ、先輩方や同級生、4回生と皆やさしく、いろいろなところで助けていただき、仲良くさせていただいており、感謝しています。楽しい研究室での生活を送らせてもらっています。私は読書をほとんどしないのですが、最近、本を読もうと思っています。研究会等に参加したりして、自分の未熟さを痛感するとともに、社会のことについてもっといろいろ知りたいという意識が出てきました。研究室には多くの本や文献があるので、それらをできるだけ多く読んでいきたいと思っています。

私は、修士課程を修了して就職するつもりです。今はまだ学生ですが、学生のうちにしかできないことがあると思うので、勉学はもちろんですが、それだけでなく日々の生活等から多くのことを学び、また時には遊び、充実した生活を送っていきたいと考えています。

● ● ●

卒業旅行



建築工学コース
博士前期課程1年

山本 愛

この春から私は大学院に入学しました。大学院入学前、サークルの友人5人と卒業旅行としてエジプトを行ってきました。エジプト10日間の旅です。

エジプトに着いた早々向かった先は、「ピラミッド」。幼い頃から歴史漫画を見ては、「ほんまにあるのかい」と思っていたピラミッド。幼い頃から歴史漫画を見ては「石でそんな建築できるなんかいな」と思ってたピラ

ミッド。たしかに、エジプトにありました。

初めて生で見るピラミッドはとにかくでかい！の一言でした。一つ一つの石も大きい。近づいたら一つの石が私よりも大きい！とにかく、スケールが違いました。



有名なクフ王のピラミッドに実際に入り、古代の人人が歩いたであろう道を実際に自分も歩きました。そうピラミッドの中はきちんと空間がありました。もちろん道もあり、歩くことができます。一体、石だけであれだけの建築をどうやって古代の人は作り上げたんでしょう？謎は深まるばかりです。

ピラミッドだけでなく、古代の宮殿も多く訪れました。古代の人の描いた壁画が多く残っており、中には、色が残っているキレイな壁画もありました。鮮やかな青色や茶色・黄色が確認できました。これらの壁画を見ながら、のんびりと古代の空気を感じつつ、エジプトでの時間を楽しみました。

古代文明に触れるだけではなく、卒業旅行ならではの楽しさ？ハブニングもありました。遺跡のお土産屋のおじさんに捕まって逃げれなくなったり（結局走って逃げました）、友人がなぜかエジプトの若者と携帯番号の交換をしていました（すぐに捨ててましたが）、皆で民族衣装を着てナイト川クルーズをしたり（その格好で踊りました）、エジプトの神様で異様に盛り上がったり。。。)

時にバカ騒ぎもしつつ楽しんだ旅行でしたが、あれから半年。改めて振り返ってみると、半年前なのに『あの頃はよかったなー楽しかったなあ』なんて思いながら、深夜の研究室でこの文章を書き上げたのでした。



一期一会



社会基盤工学科目
4年

羽原 健雄

大阪に来て今年で4年目。大学入試の時ワクワクしながら初めて訪れた吹田キャンパスは今では馴染み深い生活の場となっています。「振り返ってみればこのあっという間の4年間だった。」と、先輩方からよくお話を聞くのですが、私にとっては「なかなか長くて、刺激的で、よく考えた4年間」でした。

「よく考えた」というとなんかすごい人のように聞こえますね。「高校の頃と比べるとよく考えた」や「よく考えさせられた」という方が正しいかもしれません。大阪に来てから今まで多くの人に出会いました。人に出会い、話を聞くと、よく考えさせられます。私は中高一貫校に通っていた為か、高校まで周りの人は似たような考え方の持ち主が多かったようです。大学生になり全く考え方・境遇の異なる人と話をする機会が増え、そのたびに多くの刺激をうけるようになりました。

人の話を聞くことで、今まで知らなかった世界が垣間見え、時にはその後の自分の進路にまで影響を及ぼすことすらありました。社会基盤の分野に進む事を決めた時、部活に入る事にした時、就職先を選んだ時。そのほか自分の進路を決める際には必ずといっていい程、魅力的な人との出会いが影響しています。自分から積極的に動いて立場の違う多くの人の話を聴けるよう行動する事、また出会った人に先入観なく敬意を持って接する事がとても大切だと大学生になってから強く感じるようになりました。そうでなければ様々な人の考え方を聴く貴重な機会が減り、損をすると思います。実際にはこのように行動するのはなかなか難しく、あまり出来ていないかもしれません。しかし、今後社会に出て今以上に様々な人と触れ合う機会が多くなる為、より柔軟に考えられるようにしなければならないと感じています。

現在私は部活で一回生のコーチングをする立場おり、新人勧誘の段階で100人以上の一回生と、少しだけですが話をする機会に恵まれました。好きなだけ勉学をしようと考えている志の高い人、飽きたほど遊びたいと思っている人、バイトやサークルなど色々な

事をしたいと思っている大多数の人、部活をやる事に決めている人、当たり前ですが新入生の数だけ考え方があります。そんな新入生を相手に自分の部活の勧誘をするのですから一筋縄ではありません。そもそも部活の紹介すらさせてもらえないことが多いです。話を聞いてもらい、飲み会や練習に参加してもらった上で、入部までこぎつけるのは困難を極めます。勧誘を成功させるための作戦は数多くあり、ここには書けませんが、全ての作戦に共通して重要なのは部員一人ひとりが積極的に新入生に話しかけることです。話しかける事で相手のことを知ることができますし、部の雰囲気を感じてもらいやすくなります。「入部するか否かを最終的に決めるのは、競技の面白さでも、部の成績でもなく、雰囲気がその人に適っているか、魅力的な部員がどれほどいるかにかかっている。」これが私が新人勧説を通して得た結論です。私自身、入部を決めた最大の理由は部の雰囲気・先輩の熱心さに惹かれたからでした。最上回生となった今、当時憧れた先輩のようになれたかどうかは分かりませんが、今年はここ数年で一番多く新入部員を獲得しています。

院に行かず就職する道を選んだ私は、来年からは新しい組織の中での生活がスタート。再び新人に戻ります。出会う人の中には目標となるような魅力的な人が沢山いることでしょう。一度しかない出会いを大切に! そう心に決めて来年から頑張ります。

大学生活について



建築学科目
4年

岩本 卓麻

来年入学予定の大学院入試を先日無事に終え、受験勉強から心機一転、九月から本格的に始まる四回生としての研究・実験へ向けてこれから準備を進めていくこうかという時期に差し掛かりました。今年は四月から慣れない研究室での生活がスタートしましたが、周りの仲の良い友達や愉快でユニークな先輩たちのお陰ですぐに馴染め、日々の勉強を楽しみながら進めることができます。

今回寄稿させてもらえるということで、私なりに簡単ですが最近の大学生活について書かせてもらいます。

二年次の分属以降、建築学科生として知識を深め、建築工学の中でも特に関心を持っていた構造システム学領域の研究室に入ることができました。研究・実験はこれから本格的にスタートする（楽しみでたまらない）のですが、今まで学部時代に学んだことを実際に実験や解析に用いて、より専門的・実践的に取り組んでいくことに、囁きすると同時に正直少し不安な気持ちもありますが、先生方や先輩方からできるだけ多くの学び、研究成果を早く出せるように、ハングリー精神で研究に没頭できたらと考えています。

大学生になってから始めた事のひとつに、ヴァイオリンがあります。高校時代プロオーケストラの演奏に何度も足を運んだこともあります。オーケストラというものに以前から興味があったので、大学生になったら是非大学オケに入ろうと決めていました。私が属している大阪大学交響楽団は、楽器初心者も快く受け入れてくれる、熱心で楽しいオーケストラです。100人を超える先輩後輩がいるので、いろんな友達ができ大家族のようなものですね。幸いにもピアノを弾いていたこともあり楽譜読みはできたのですが、楽器を1から始めるということは予想していた以上に大変なことで、1・2回生の頃はほとんど毎日基本的な練習をしていました。しかし音楽が好きでヴァイオリンを愛する気持ちがあれば、辛い練習も苦ではなく、下手ではありますが2回生の夏から毎年2回の演奏会に出演できるまでになりました。回生を超えて皆で1つの音楽を作っていくこの学生オーケストラにとって、単にそれぞれが楽器を演奏するのではなく、全員が1つになり全力をあげて、音楽への情熱を客席に伝えることができれば、これ以上の成功はありません。他のサークル活動ではできないようなこの交響楽団での経験は、きっと将来の自分に何か役立つのではないかと思います。

このヴァイオリンを始めなければ絶対にできなかつたであろう経験もできました。昨年冬にユニバーサルスタジオジャパンでの夜のChristmas Showステージで、偶然にもヴァイオリニストとして演奏するチャンスに恵まれ、夢のような経験ができたのです。USJのキャスト達だけでなく、同じ世代の音大生やプロオーケストラの人たちとも知り合えて、また新たな世界が広がりました。今年の冬にも依頼があり、また一

つ思い出ができそうです。

大学での生活というものは、自分の興味のある事についての知識を深められ、自分の時間を勉強に限らずさまざまな事に使うことで自分を磨くことができる、人生においても大切な時間だと思います。また、一緒に旅行したりお酒を交わしたり、いつも周りにいてくれる友達は僕の宝物であり、全国から同じ志を持った者が同じ大学に集まり、共に学びを深めたこの時間は、充実したかけがえのないものです。建築というモノづくりの世界においても、モノづくりが生きるのは、自分の分野に夢を持っている者が集まった時ではないかと思います。大学院卒業後、社会に出てからもこの前向きな姿勢のまま、それぞれの分野に飛び出していけるように、残りの学生生活を精一杯過ごしたいと思います。

3回生の悩み



社会基盤工学科目
3年

田野 司也

「構築会たより」原稿ご執筆の依頼を先生から受けたのは、再履修の流体力学の授業中でした。先生のうまい説明文句に「やったるで～！」と気合を入れて依頼をうけた。でもよく考えると私は日本語というか文章を書くことが最も苦手である。てか国語 자체が苦手で、高3の時に、（数学の偏差値）－（国語の偏差値）＝50という成績をとったこともある（笑）くわえて作文というものを本気で書いたことがない。適当に書いて、済ませていた。引き受けたのを後悔しています。ただ引き受けてしまったものは仕方がないので頑張って書きます。ただ、文末表現は無茶苦茶、たまに口語は混じるわけで作文として成り立たないかもしれません。今はただ、この文章を見て先生方の私に対する評価が落ちないことを願うのみ…ではそろそろマジメに書きます。

人の行動範囲は、地球の大きさに比較すれば極めて微小である。たとえば、個人が一生かかって移動した動線を、世界地図の中に書き込むことを想像するとする。それは大部分が点であり、それ以外であっても、

航空路と一致した線分の集合に過ぎないだろう。どんなに沢山の点が集まつたところで、有限であるかぎり線になることはない。またどれだけ線を重ねても、面を塗り潰す結果にはならない。

それでも、いつも行く場所、いつも通る道がいくつかあって、我々はそれらの組み合わせの中で生活している。ときどき、突然変異の如く、新しい場所へ、また新しい道を通って、出かけていくことがあり、それが気に入れば、その場所あるいは道を、自分の点と線のささやかな集合に加えることになる。毎日違う道を選択しても、その数は知れているけれど、そのたかだか数万、数千という数を、人間（特に私たち若者）は無限だと思えるかもしれない。同じように、時間についても無限と思えるかもしれない。しかしながら人間というものは1000ヶ月も生きれば長生きな方なのだ。学部生である時間はわずか48ヶ月（留年しなければ笑）しかない。

上に書いたように大学生に与えられた時間はわずか48ヶ月しかない。その48ヶ月のうち、すでにもう約29ヶ月も過ぎてしまった。1年生の時はバイトに明け暮れていた。2年生の時は必修の専門基礎の勉強におわれて自分のしたいこともままならない状態だった。3年生になり、より専門的な分野に入りましたが、授業数が減りなんとか自分の好きなことをできる時間が持てるようになりました。なので、最近はよく建築物、土木構造物をドライブがてら見学に行ったりします。そういう時間を持てるようになったことがとても嬉しい。しかし、時間的制約、金銭的制約の中、近場のものしか見学に行けないことがつらい。

そんな中で私は成長できているのであろうか、と最近はとても焦ってしまう。今一番悩んでいるのが、院に進むべきかどうかだ。最近の勉強はとてもおもしろいものが多く、院に進みより専門分野のことが知りたいと思う反面、早く社会に出てみたいとも思う。みんなは、どーやって決めたんだろう？よく、就職が嫌で院に進むか、勉強が嫌で就職するかのどっちかだという話を聞く。なるほど、と思うのだが私はどちらにも属さない気がする。

とりあえず、9月にインターンをするので、自分でどういう変化が起こるのかが楽しみだ。2週間という短い期間であるが大学での勉強とは違い、現場の空気にふれる。それは、なかなか出来ない経験で、また私を成長させてくれるものだと思う。

はい、文章のオチが見つかりません。やっぱりダラダラ書きすぎました。というか、本当の今の一番の悩

みは顔写真だ。昔から写真うつりが悪いです。…でもしかたがないから今から、写真うつりのいいやつ探します。ではこの辺で。

おざなりなおざり



建築工学科目
3年

來田 成弘

何を書こうかな？って、考えていると早くも締め切り期限から4週間が経ちました。構築会の編集者の先生方、ご迷惑をおかけして申し訳ございません。

僕のこれまでの大学生活について振り返っていこうと思います。

大学受験まで訳もわからず、みんながと同じようにただ何も考えずに流れに任せて大学生になった僕。このままではダメだと思い、大学生活では自分でやりたいことを見つけて、それに没頭してやろうと決意しました。

やりたいことが見つかったのは2年の後期。クラスの友達と意気投合して、スポーツサークルを作ることになりました。このとき、サークルに僕の大学生活のすべてのパワーを注ごうと決意しました。他大学に勧誘に行くと、恐ろしいほどの人が集まってすぐに20人規模のサークルが出来上がりました。サークルは順調にいき、この4月には、このサークルがこれからもずっと何年も続いて欲しいという願いから後輩を入れることになりました。後輩もたくさん入ってくれて40人を超すサークルになりました。その分、責任もどんどん重くなってしまい、問題もたくさん出てくるけれども、そのたびにサークルのみんなと話し合いながら、さらにつよいサークルになっていくのを感じています。

サークルに没頭するあまり、勉学の方ひどいあります。設計課題は「おざなり」にしてしまいました。そのため成績も着実に下がっていき、最近では「留年」という言葉ちらついてきました。まずいです。やばいです。でもこんなダメな僕なのに、いろいろな事に相談にのってくれる先生方に感謝しています。

今自分の書いた文章を読み返してみると自分でも何が書きたかったのかわかりません。

とにかく伝えたかったのは
「僕は今、大学生活を思いっきり楽しんでいる！」
ということです。これからも、サークルに力を注ぎ、
いっぱい遊んで、もうちょっとだけ勉強も頑張ってい
こうと思います。



スポーツサークル「おざなりなおざり」集合写真

● ● ●

現実と夢幻に生きる或る大学生の肖像

社会基盤工学科
2年

岡田 博徳

「人皆我師」。この言葉は最近、大学で高校の恩師の一人と閑談する機会があり、その際話題に上った。私達は生涯の中で多くの仲間、物事に邂逅する。全ての物事は一期一会のものであるが、その全てを心に止め置くことは叶わぬ記憶の隙間から零れ落ちてゆく。人は多くのものを日々失いながらもその残滓から個々それそれが様々なことを学び成長していく。一つの事象から得ることは千差万別であることを責めることはできず、唯々「大切なこと」を見落とすことのないように柔軟な感性をもって「気付く」ことが豊かな人生をおくる上で重要なだろう。

大学生活も二年目に入り、一人暮らしをする中で家事全般等の両親の苦労を垣間見、自分の「普段の生活」というものがどのように成り立っているのかを痛感させられる。為すべきことを為さねば何も変わらず、停滞するばかりであるという当たり前のことさえ、意識せずにはいられない。これもまた、一つの「気付き」である。

交響楽団の活動からは組織の在り方と社会との関り、何より音楽との向き合い方について考えさせられ、学ぶことが多くある。時代を超えて語り継がれる音楽というものは、謝肉祭で奏でられるものもあれば、戦

争という過酷な背景を背負い込んだものまで歴史の重みを耐え抜くほどのエネルギーをそれぞれが持っている。だからこそ演奏する側も、それ相応の覚悟をもって取り組まなければならない。だがもっとも大切なことは、音楽というものは「音」を「楽」しみ、「楽」しませるもので無ければならないということである。人に感動を与えるためには、生半可な表現では通用せず200%のものでやっと100%のものが伝わるかもしれないというほどで、相手のこころを動かすには期待されたもの以上の「何か」が必要なのだと思う。よりよい音楽をするには厳しい練習を課さねばならず、ともすれば歓びを見失いそうになるもの、自分達の追い求める音楽というものは一体何なのかを探しながら、皆に必要とされるような楽団にしていきたいものであるし、そのためにも人として人に「何か」を与えることが出来るような深い人間たるべきだと「気付かされた」。

さて、それでは今籍を置く学科について記そうと思う。人が生き続け社会というものが在り続けるならば社会基盤という学問もまた成立し続ける。二年次から始まる専門的な講義を通じて、社会基盤という「人が生活する物理的・社会的基礎空間」という世界の一端を学び、その多様性と重要性を体感しているわけだが、なぜ自分がこの分野を学ぼうと思いついたのかを改めて考えてみると、一つは上記のように人が存在する限り、時代を問わず人々に必要とされる確かな存在であること、二つに建築・構築・デザインといった物作りに興味があったこと、三つに人の幸せを考え、人とのコミュニケーションの中で生まれるものであること、この三つが主なものだろう。しかし、そこにはコインの裏表のような思いがあるのかもしれない「気付いた」。先人達の長年の努力の結晶たる技術を、その理論を知らずとも無意識のうちに巧みに操り、何不自由なく自分の必要とするものが手に入る時代に生きる私達がいる。一方、専門家達は、複雑に分岐する道の先で、バベルの塔が如くに自然の摂理に到達すべく更なる高みを目指し、物事の因果を単純明解に規定するために構築されたはず科学的学問も、時が経つにつれ、真理の追究のため迷路が如き難なものになりつつある。それを目の当たりにしたとき、その先に待つものに、言葉には出来ない一抹の不安を感じてしまい、「今ここにあるもの」を守りたいと直感的に感じたのかもしれない。未知への挑戦への恐怖を感じ、ただ現実から目を逸らしているのかもしれないが、不可視の歪みのようなものに囚われているような気もする。この迷

いを断ち切るもしくは答えを決定するのは自分自身でしかないのだろうが、もう少し時間がかかりそうだ。

「今」という可能性が無限に与えられる世界、そこでは自己の決定と選択の意思が大きな力を持つ。自分はなかなか欲張りなようで、可能性を確定することを恐れ自由でありたいのかもしれない最近ひしひしを感じるが、自分の在り方を省み、終始一誠意、本当にやり遂げたいことを見付け、自分の心に恥じない生き方を貫きたいと切に願う。

・ · ·

3セメスターを振り返って



建築工学科
2年

中井 千尋

今日は八月十三日。「待ちに待った夏休み」が始まつて一週間たち、私の体内時計はすっかり夏休みモードになっています。そろそろ原稿を書かないとと思い、パソコンに向かったのですが、思うように筆は進みません。でも、そんなこともしていられないでの、まず3セメスターを振り返ってみようと思います。

建築学科に配属されて、最初は今までの学校の授業と異なることに戸惑いつつ毎日を過ごしていました。でも気づくと自分が興味をもてるることを、自然に見つけることができていて授業が楽しくなりました。私が初めて経験した試練は図面のコピーをする課題でした。大きなケント紙にひとつひとつ図面を書いていく作業は単純作業ではあるのになかなか進みませんでした。一つになつたら終わるかわからない不安の中、時間だけが過ぎていく日々でした。結果として製図でなくなったゴールデンウィークを目にして、これが建築学科に入ることなのかと、わけのわからない納得をしていました。また、授業では、友達と協力して何かを作成することも多かったように思います。その中で意見がまとまらなかつたりして苦労することもありましたが、友達から新しいことを学ぶことも多く、刺激を受けました。最後の方になると製図や模型の提出期限前になるたびに、製図室で徹夜するようになりました。製図室にみんながいるから頑張れるということを感じずにはいられませんでした。いろんなことがありました、気づけばクラスもとても居心地のよい場所になっ

ていました。早く過ぎたようで、意外と内容の濃かつた3セメスターはこのようにして過ぎ去りました。建築の勉強は辛かったり、苦労することもたくさんありますが、日々新しい発見があつたり、感動したり、自分のライフスタイルを見つめなおすことができたりして、とても楽しいです。

今、夏休みになって、いきなり学校という制約から解き放たれ、少し虚無感も感じます。夏休みは基本穏やかに過ごしています。バイトは週2で個人塾の教師をしています。一年以上続いているので生徒とも打ち解け、彼女たちを受験までうまくサポートしていけたらなと思っています。また中学校、高校時代の友達と久しぶりに再会しました。高校までの六年間ほとんど一緒に行動していた仲間ですが、今では法学部、商学部、薬学部、建築とみんなそれぞれ異なる分野の勉強をし、異なる生活を送っています。そのためか今の学校生活や昔の思い出など話題がつくることなく、楽しい時間を過ごせました。時間がある時は建築を見に行くこともあります。今日はヨドコウ迎賓館に行きました。芦屋川までは電車で15分。駅を歩くとすぐに迎賓館の上部が見えてとても興奮しました。建物は大谷石や銅版などで細部までこだわりがあり、ずっとその場にいたいと思わせる魅力を感じました。私もそういう魅力のある建物を作りたいと思いました。読書も心がけています。小説は何冊か読みました。建築関係の本も読みたいなどと思い、J・シェイコブスの「アメリカ 大都市の死と生」を買いました。都市計画に少し興味があったのと、訳者が黒川紀章であることに惹かれました。まだ、開いていませんが、この夏休み頑張って読んでみようと思います。あとは、実家通いなのですが、家にいると小学校5年生の弟の夏休みの宿題を手伝わされて四苦八苦しています。今後の予定は20日に友達と福岡に行きます。初めての九州です。よく知らない場所ですが、今回は積極的に回って見ようと思います。夏休み、まだ始まったばかりですが、この夏休みが終わるころには何かひとつでも成長できたなと思えることがあるとうれしいです。



2007 年度構築会役員会報告

日 時 :	2007 年 5 月 28 日 (月) 17:30 ~ 19:10
場 所 :	大阪大学中之島センター 2 階講義室
参加人数 :	33 名

主な議題 :

1. 2006 年度事業報告・会計報告

(1) 本部事業報告・会計報告

山中幹事長、向出幹事より、本部 2006 年度事業報告、会計報告があり、了承された。

(2) 支部事業報告・会計報告

東京支部・中村支部長、愛知支部・矢野支部長、大阪支部・中村幹事長、兵庫支部・橋本幹事長、広島支部・坂手支部長より、各支部の 2006 年度の事業報告と会計報告があった。

2. 2007 年度役員選出

会長に昨年度副会長の谷口氏 (A70)、副会長に福田氏 (C73) を選出した。監事に山見氏 (C90)、中塚氏 (A90)、新幹事長に玉井准教授 (C85)、新幹事に猪井助教 (C99)、2007 年卒業生代表役員に、峯沢氏、堀本氏をそれぞれ選出した。

3. 2007 年度事業計画案・予算案

(1) 本部事業計画案・予算案

玉井幹事長、向出幹事より、2007 年度の事業計画案、予算案について説明があり、原案通り了承された。

(2) 各支部事業計画案・予算案

各支部より事業計画案、予算案についての説明があり、原案通り了承された。

4. 構築工学科創立 60 周年記念事業

中辻社会基盤工学部門長より、事業計画の説明があった。構築会共催とすることについての要請があり、了承した。

5. 各支部の地域範囲について

山中前幹事長より、大阪支部に京都府、奈良県、滋賀県、和歌山県在住者あるいは在勤者を含める案が提案され、了承された。また、静岡県については、愛知、東京の両支部に所属しているため、いずれかの支部に所属するように、両支部間で調整するように要請があった。

【幹事長 玉井 昌宏 (C85) 記】

◇2006年度 会計報告◇

(2006年5月1日～2007年4月30日)

●収入の部

	2000年度実績	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2006当初予算
会 費	6,419,300	6,354,270	5,077,520	4,840,636	5,581,710	4,836,050	7,705,110	4,800,000
広 告 料	1,160,000	559,160	718,740	438,845	419,340	379,380	379,220	420,000
利 息	1,960	1,437,089	5,152	57	422	4,408	2,569	0
寄 付 金 他	0	0	0	0	0	100,000	0	0
そ の 他	0	0	0	54,000	0	10,005	11,000	0
単 年 度 小 計	7,581,260	8,350,519	5,801,412	5,333,538	6,001,472	5,329,843	8,097,899	5,220,000
前 年 度 繰 越	6,991,873	6,730,119	8,512,609	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,852,532	4,852,532
収 入 計	14,573,133	15,080,638	14,314,021	11,873,233	12,176,645	9,876,960	12,950,431	10,072,532

●支出の部

	2000年度実績	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2006当初予算
名簿印刷費	4,255,587	2,384,130	4,126,710	2,106,696	4,115,679	2,230,000	3,510,000	4,200,000
名簿発送手数料	0	0	0	0	0	0	0	0
郵便通信費	239,074	143,263	170,447	77,764	86,126	95,511	223,170	100,000
謝 金	327,000	390,000	285,000	312,000	322,000	312,000	322,000	320,000
記念品代	275,100	246,780	243,660	124,330	153,580	186,061	257,375	200,000
支部援助金	1,577,300	1,658,300	1,823,450	1,697,450	1,678,100	995,800	1,744,800	1,700,000
教室寄付金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
行 事 費	0	579,503	0	0	0	0	0	0
会 合 費	193,312	83,795	239,335	405,500	197,400	228,820	230,084	250,000
出 張 費	59,760	59,760	0	59,760	47,400	61,160	59,960	60,000
慶弔費	580	95,602	63,300	105,833	215,890	66,600	66,600	100,000
備 品	0	0	0	0	0	0	0	0
消 耗 品 費	5,650	13,651	13,604	462	1,218	18,045	2,832	20,000
振替手数料	109,651	11,130	8,820	8,265	12,135	3,891	3,341	10,000
会費滞納 分催促費	0	102,115	0	0	0	0	167,675	0
そ の 他	0	0	0	0	0	26,540	0	0
支 出 計	7,843,014	6,568,029	7,774,326	5,698,060	7,629,528	5,024,428	7,387,837	7,760,000

	2000年度実績	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2006当初予算
残 高	6,730,119	8,512,609	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,852,532	5,562,594	2,312,532

●繰越金内訳

	2000年度実績	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績
定額貯金	3,800,000	5,200,000	5,204,990	5,204,990	4,200,000	2,000,000	2,000,000
郵便為替	83,750	503,140	2,930	32,620	5,870	11,800	295,090
郵便貯金	634,774	2,126,325	1,174,118	438,308	0	2,422,402	2,728,853
銀行預金	1,992,177	631,755	30,584	439,442	340,023	339,404	436,231
現 金	219,418	51,389	127,073	59,813	1,224	78,926	102,420
合 計	6,730,119	8,512,609	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,852,532	5,562,594

第一回定期会議

◇2007年度 事業計画◇

事業項目	実施時期
1. 構築会たよりの発行・配布	2007年11月頃
2. 記念品の贈呈	
卒業者、新規修了者（シャープペンシル）	2008年3月
卒業30周年の会員（タイピン or ネックレス）	随時
3. 支部活動への補助	2008年3月
4. 社会基盤・建築工学教室への寄付	2008年3月
5. 構築工学科創立60周年記念事業	随時
6. 役員会の開催	2007年5月28日
7. 「構築会を考える会」の開催	随時

◇2007年度 予 算◇

●収入の部

	2007年度予算	備考	2006年度実績	2005年度実績	2004年度実績	2003年度実績	2002年度実績
会費	5,000,000	前々年度会費納入実績に応じて	7,705,110	4,836,050	5,581,710	4,840,636	45,077,520
広告料	380,000	前々年度並み	379,220	379,380	419,340	438,845	718,740
利息	0		2,569	4,408	422	57	5,152
寄付金他	0		0	100,000	0	0	0
その他	0		11,000	0	0	54,000	0
単年度小計	5,380,000		8,097,899	5,329,843	6,001,472	5,333,538	5,801,412
前年度繰越	5,562,594		4,852,532	4,547,117	6,175,173	6,539,695	8,512,609
収入計	10,942,594		12,950,431	9,876,960	12,176,645	11,873,233	14,314,021

●支出の部

	2007年度予算	備考	2006年度実績	2005年度実績	2004年度実績	2003年度実績	2002年度実績
名簿印刷費	2,000,000	前々年度より削減	3,510,000	2,230,000	4,115,679	2,106,696	4,126,710
郵便通信費	100,000	平年並み	223,170	95,511	86,126	77,764	170,447
謝金	320,000	平年並み	322,000	312,000	322,000	312,000	285,000
記念品代	260,000	昨年度並み	257,375	186,061	153,580	124,330	243,660
支部援助金	1,250,000	別紙参照	1,744,800	995,800	1,678,100	1,697,450	1,823,450
教室寄付金	600,000	別紙参照	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
行事費	400,000	構築工学科創立60周年記念事業	0	0	0	0	0
会合費	250,000	平年並み	230,084	228,820	197,400	405,500	239,335
出張費	60,000	平年並み	59,960	61,160	47,400	59,760	0
慶弔費	150,000	平年並み	66,600	66,600	215,890	105,833	63,300
備品	0		0	0	0	0	0
消耗品費	10,000	平年並み	2,832	18,045	1,218	462	13,604
振替手数料	10,000	平年並み	3,341	3,891	12,135	8,265	8,820
会費滞納 分催促費	0	実施予定無し	167,675	0	0	0	0
その他	0		0	26,540	0	0	0
単年度小計	5,410,000		7,387,837	5,024,428	7,629,528	5,698,060	7,774,326
次年度繰越	5,532,594		5,562,594	4,852,532	4,547,117	6,175,173	6,539,695
支出計	10,942,594		12,950,431	9,876,960	12,176,645	11,873,233	14,314,021

構築会役員一覧

会長 谷口 康彦 (A70)
 副会長 福田 保 (C73)
 監事 山見 晴三 (C90) 中塚 光一 (A90)
 幹事長 玉井 昌宏 (C85)
 幹事 向出 静司 (A00) 猪井 博登 (C99)

学年委員

	土木	建築
1950		
1951	木田 五一郎	伊藤 俊夫
1952	竹山 喬	木村 康彦
1953	高野 浩二	大久保昌一
1953	濱 宏	片倉 健雄
1954	松山 巍	杉原 正昭
1955	堤 道夫	荒木 兵一郎
1956	波田 凱夫	山田 俊満
1957	広内 徹	秦 洋一郎
1958	豊島 良三	脇山 広三
1959	上根 善教	金田 宏
1960	小野 敦	藤井 象一
1961	村上 昇	真塚 達夫
1962	榎木 通男	入江 恰一
1963	松井 保	中江 新太郎
1964	濱田 圭一郎	森田 晴美
1965	島田 壮八郎	小島 孜
1966	宇野 剛正	川畠 幸一郎
1967	梶川 靖治	竹嶋 祥夫
1968	谷口 剛也	香西 喜八郎
1969	武内 一彦	大津 俊雄
1970	阿部 信晴	木林 長仁
1971	伊藤 伸司	角 彰
1972	木村 正二	森田 孝夫
1973	森永 勝登	木村 修治
1974	青木 利博	巽 昭夫
1975	富士川 洋一	家倉 泉
1976	長谷川 善信	鈴木 克彦
1977	蓮輪 賢治	古宮 嘉之
1978	後野 正雄	吉村 英祐

	土木	建築
1979	正田 正一	有坂 伸二
1980	辰谷 義明	多田 元英
1981	戸上 拓也	菅原 正晴
1982	中田 憲正	山中 俊夫
1983	山辺 建二	丁野 成人
1984	藤田 真	板田 昌彦
1985	玉井 昌宏	杉本 正三
1986	山内 一浩	桐野 健治
1987	武藤 和好	芦田 智之
1988	鍋島 康之	椎名 辰之
1989	小野 正博	川合 通裕
1990	山見 晴三	中塚 光一
1991	村上 茂之	向井 洋一
1992	小野 潔	岩井 潔
1993	大西 弘志	若松 達史
1994	神田 忠士	澤井 祥晃
1995	荒木 進歩	西 豊
1996	松本 忠	田中 聰
1997	山内 淳平	八木 秀樹
1998	木村 充	橋本 武士
1999	下村 公一郎	寺前 隆
2000	内田 美範	多田 正治
2001	橋本 保則	軸丸 久司
2002	竹口 直樹	山本 訓久
2003	蒲原 武志	藤本 正基
2004	青木 康素	柴田 景太
2005	窪田 勇輝	川島 尚教
2006	宮田 亮	竹島 健一朗
2007	峯澤 博行	堀本 明伸

支部役員一覧

【支え式賃支西大】

大阪支部	支 部 長	綿 谷 茂 則 (C73)
	副支部長	沢 田 隆 志 (A72)
	副支部長	中 平 明 憲 (C77)
	幹 事 長	山 口 博 章 (C81)
愛知支部	支 部 長	矢 野 修 一 (C74)
	副支部長	青 木 伸 一 (C81)
	幹 事 長	降 簾 達 生 (C83)
東京支部	支 部 長	中 村 康 一 (A73)
	副支部長	上 阪 恒 雄 (C70)
	幹 事 長	高 久 雅 喜 (C84)
兵庫支部	支 部 長	橋 本 彰 (A72)
	副支部長	志 波 秀 明 (C71)
	幹 事 長	岩 橋 哲 哉 (C81)
広島支部	支 部 長	坂 手 道 明 (C71)
	副支部長	芥 川 省 三 (C74)
	幹 事 長	増 田 伊知郎 (C80)

【大阪支部たより】

支那支部会員

構築会会員の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお慶び申し上げます。

大阪支部では、今年度より新役員のもと活動を進めていくこととなりましたので、ご挨拶をかねまして、大阪支部の近況についてご報告させて頂きたいと思います。

現在、構築会につきましては、東京、愛知、大阪、兵庫、岡山の各支部において、様々な取り組みが行われてきたところでありますが、昨年度大阪支部では、初めての試みとして、これまで支部が結成されていなかった京都、滋賀、奈良、和歌山に在住の会員の皆様約240名を見学会・総会にお招きし、大変ご好評を頂きました。このため今年度には、これらの方を大阪支部に加えまして総勢約1,700名体制とさせて頂きました。我々としては、この1年間、皆様方のご期待に応えられるよう、構築会大阪支部の発展に努めて参りたいと考えていますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

さて、大阪周辺での近況をお話致しますと、今年8月25日から9月2日までの9日間、212の国と地域が参加した世界陸上大阪大会が大阪市の長居陸上競技場で行われました。世界のトップアスリートたちが一同に会し、“より速く！より遠く！より高く！”を目指した力かぎりの活躍振りに、大阪が、世界が熱い感動と興奮に包まれました。このような世界大会が大阪で行われることで、大阪の知名度がUPすることとなり大変嬉しいものです。

土木・建築分野においても、現在、様々なビックプロジェクトが行われており、ご存じのように、大阪駅北地区においては、関西の再生をリードする新しい拠点として、21世紀のモデルとなるような、美しく、活力と風格のあるまちづくりが平成23年のまちびらきを目標に進められているところあります。また、今年8月2日には、関西国際空港の第2滑走路がオープンしたこと、わが国初の完全24時間運用空港が実現し、国際標準として世界に誇ることができる国際拠点空港が誕生するなど、わが国の経済活性化や国際競争力向上に寄与する拠点の形成が盛んに行われています。

さらに、昨年12月24日には地下鉄今里筋線が開業し、平成19年度以降、京阪中之島線、阪神なんば線、JRおおさか東線の開業が相次いで予定されており、これにより近畿圏における鉄道ネットワークがさらに充実し、ますます交通の利便性も高まるものと期待しているところあります。

我々土木・建築技術者として、このような社会基盤を根底から支えていることに大きな誇りを感じるところであり、これからも、構築会大阪支部の皆様がその一翼を担っていくものと確信しております。今後、講演会や総会などを通じて情報交換や情報発信を行うことで、構築会の結束をより強固なものとし、皆様のために微力ながら貢献できれば幸いと考えております。今後、総会等において具体的な内容を詰めていくよう考えておりますので、このような機会に、再度ご報告させて頂きたいと思っております。

支 部 長 綿 谷 茂 則 (C73)

副支部長 沢 田 隆 志 (A72)

中 平 明 壽 (C77)

監 事 和 田 雅 洋 (A77)

榎 原 範 明 (C78)

幹 事 長 山 口 博 章 (C81)

【愛知支部たより】

愛知支部は、東海三県といわれる愛知県、岐阜県、三重県に在住もしくは勤務している会員で構成しています。東海三県での近況をお知らせします。

・愛知支部総会を開催しました。

2006年3月9日愛知支部総会を開催しました。総会では、27名の方に参加していただきました。連絡先の判明している会員数は164名ですので、参加率16%です。

総会では、愛知支部元会長の大藪貞利さん[C56]、と佐藤工業株式会社の石川博英さん[C92]に講演をしていただきました。

ベテラン会員と、若手会員の発表をしていただくことで、幅広い年代層の会員相互のコミュニケーションがよくなつたように感じます。

・中部のビックプロジェクト

好景気が続く中部地方では、様々なビックプロジェクトが最近1年から今後1年で竣工します。主たるプロジェクトの概要をお知らせします。

■名古屋ルーセントタワー

名古屋市西区牛島町6番1号

敷地面積14,100.54m²、地下3階、地上40階、高さ180m、延床面積115,200.34m²

鉄骨造一部鉄骨鉄筋コンクリート造

■モード学園スパイラルタワーズ

名古屋市中村区名駅四丁目27番内

地上36階、地下3階、最高部170.00m、敷地面積3,540m²、延床面積48,988.96m²

■徳山ダム

岐阜県揖斐郡揖斐川町中央遮水壁型ロックフィルダム

堤高161メートル、堤頂長427.1メートル、堤頂標高406メートル

堤体積約13,700,000立方メートル

目的；洪水調整流水の正常な機能の維持新規利水発電

今年度の愛知支部役員は以下のとおりです。

支 部 長 矢 野 修 一 (C74)

副支 部 長 青 木 伸 一 (C81)

顧 問 今 倉 邦 彦 (A57)

森 下 弘 士 (C58)

監 事 格 清 哲 夫 (A72)

幹 事 長 降 簡 達 生 (C83)

東海地方にご異動の際には是非お仲間に加わっていただきたいと思います。

【幹事長 降簡 達生 (C83) 記】



【東京支部たより】

【ひまわり支会】

東京支部では、平成 19 年 7 月 20 日に、第 21 回支部総会・懇親会を開催しました。

総会・懇親会においては、来賓として構築会本部から谷口会長、中辻先生、横田先生、お忙しいスケジュールの合間を縫ってご参加いただき、約 70 名の支部会員とともに懇親を深めることができました。

また、総会に先立ち、支部協賛の形で中辻先生に「全国の海の再生プロジェクト」と題して講演をお願いしました。日ごろ、学問的なことから離れている会員の方々にとっても興味深いお話を良い刺激になったと思います。

総会では平成 18 年度の活動報告および会計報告と平成 19 年度の活動計画が承認されました。また、来年度は支部長の改選期にあたることから、次期支部長として上阪氏が選任され、次期副支部長として高井氏の指名および紹介がありました。なお、その他役員についても若干の交代があり、平成 19 年度は以下の役員で活動を開始しています。

支 部 長	中 村 康 一 (A73)
副支部長	上 阪 恒 雄 (C70)
監 事	高 井 正 行 (A77)
幹 事 長	高 久 雅 喜 (C84)
幹 事	河 野 貞 男 (C77) 丑 場 英 温 (A78)
	北 川 真 (C79) 新 村 洋 行 (A81)
	浜 井 邦 彦 (C82) 鬼 丸 貞 友 (A82)
	大 田 哲 也 (C83) 平 松 一 夫 (A83)
	福 岡 篤 信 (C84) 山 本 和 伸 (A84)
	谷 村 幸 裕 (C87) 石 井 晃 (C89)
	竹 内 一 郎 (A91) 橋 口 也 人 (C92)
	下 野 正 人 (C93)

追伸) 東京支部では、連絡手続きの合理化を図るため、会員の皆様の mail アドレスのデータベースを構築しています。もちろん、ご了解が得られた方に限りますが、支部総会案内への返信などの際に mail アドレスもあわせてご連絡いただけると幸いです。

【幹事長 高久 雅喜 (C84) 記】



【兵庫支部たより】

【ひよし監査員会】

兵庫支部では、毎年、見学会と総会・講演会の2回の活動を行っています。平成19年の活動のうち、7月26日に開催した見学会についてご紹介します。

今年は、3箇所の視察先の協力を得て、また、谷口構築会会长にもお越しいただき、猛暑のなかでしたが31名の支部会員が参加しました。

まず1箇所目は、三木総合防災公園内に建設されている屋内テニス場を訪ねました。この施設は屋内に9面のテニスコートを持ち、メインとなるセンターコートは、1,500人の観客収容人数を誇る日本最大級の屋内テニス場です。平常時は県民のスポーツ・レクリエーションの拠点として、災害時には応急活動要員の集結や救援物資の保管などに利用が可能な防災施設の中核となっています。鉄骨トラスのドーム構造で造られた柱のない大規模空間に驚きの声があがりました。

2箇所目は東灘下水処理場で、ここでは、下水の汚泥を処理（発酵）する内空1万m³のPC卵形消化タンクの建設現場とそこで発生するガスを精製し、天然ガス自動車の燃料となる「こうべバイオガス」の施設を見学しました。私たちの生活で出る下水から発生するガスを、資源として生かし、地球環境の保全に貢献する試みは興味深いものでした。

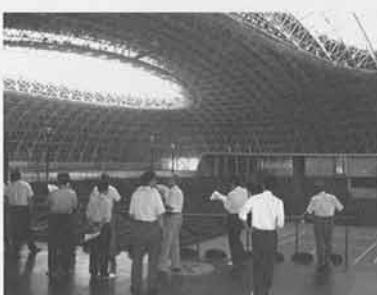
最後は、ポートアイランドにこの春開設された神戸学院大学キャンパスにうかがいました。ここでは、コンテナバース跡地の大規模再開発から大学キャンパス誕生までの経緯を詳しく説明していただきました。

その後は、社会基盤工学部門長の中辻先生をお迎えし、このキャンパス内の一流ホテル直営レストランで、盛大に懇親会を行いました。暑く汗だくの見学を終えて、海の見える風景の中、いただくビールは格別の美味しさでした。

11月20日には総会・講演会を開催する予定で、このような多彩な催しを通じ、会員間の交流と情報交換の場を提供していければと考えています。

支 部 長	橋 本 彰 (A72)
副支部長	志 波 秀 明 (C71)
監 事	田 中 均 一 (A76)
顧 問	松 浦 勢 一 (C53)
	木 村 公 之 (A59)
	神 田 徹 (C63)
	岸 田 威 (C66)
佐 俣	千 載 (C71)
相 談 役	長 尾 直 治 (A69)
	道 奥 康 治 (C77)
幹 事 長	岩 橋 哲 哉 (C81)
	中 山 久 憲 (C73)
	王 柏 群 (A54)
	入 江 恭 一 (A62)
	明 渡 稔 輔 (C65)
	西 田 泰 晖 (A68)
	川 谷 充 郎 (C72)

【幹事長 吉村 文章 (C82) 記】



三木総合防災公園屋内テニス場
無柱の大規模空間に感動する見学者



こうべバイオガス施設と天然ガス自動車の見学

【広島支部たより】

【りえ次郎支店】

構築会広島支部は、1999年5月に発足し今年で9年目を迎えました。

広島地区では、総会と現場見学会などのイベントを毎年開催しており、昨年度は広島県内の工事現場見学会として、架設中の（仮称）豊島大橋を見学しました。豊島大橋はケーブル工事の施工中で、C83卒の奥本武司 ケーブル工事JV所長に案内していただきました。

本橋は単径間吊橋であり、下部工・主塔工事・ケーブル工事・補剛桁工事のそれぞれの段階で本四架橋の経験を生かしながら最新技術を導入してコスト低減が図られています。直射日光によるケーブルの変形など長大橋ならではの特徴を見聞でき、大変有意義な見学会でした。

平成19年度の行事として、季節の良くなる秋に向けて、県内の現場見学会の開催を企画しておりますので、改めてご案内致します。

また、9月12日には土木学会全国大会にあわせて懇親会を行います。同窓生との出会いを楽しみにしておりますので、多数のご参加をお願い致します。

最後になりましたが、他地区より広島地区に転入された方がおられましたら、広島支部役員までご連絡頂けますようお願い致します。

追伸) 広島支部の会員の方で、転勤等により連絡先の変更があった場合には、広島支部幹事まで連絡を頂けますようお願い致します。また、電子メールによる連絡を主体として連絡の合理化を図ろうとしています。電子メールアドレスをご連絡頂いていない支部会員の皆様は広島支部幹事宛に連絡頂ければ幸いです。

支 部 長 坂 手 道 明 (C71)

副支部長 芥 川 省 三 (C74)

監 事 増 田 伊知郎 (C80)

幹 事 長 島 田 伸 彦 (C74)

幹 事 蒲 原 幹 生 (C87) 小 西 英 明 (C95)

南 博 高 (C95) 下 村 和 也 (C97)

久 保 充 司 (C98)

【幹事長 増田 伊知郎 (C80) 記】



現場見学会全景写真



トンネルアンカ一定着部

構築会会則

平成 17 年 4 月 1 日改正

總 則

- 第 1 条 この会は構築会という。
- 第 2 条 この会は会員の親睦を計ることを目的とする。
- 第 3 条 この会は事務局を大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻のうち、社会基盤工学コースあるいは建築工学コースのいずれかに置く。
- 第 4 条 必要なときは役員会の議決によりこの会の地区支部、職場部会を設けることができる。

会 員

- 第 5 条 この会の会員は
- (1) 大阪大学工学部構築工学科、土木工学科、建築工学科、地球総合工学科の土木工学科目、社会基盤工学科目ならびに建築工学科目の卒業生、学生
 - (2) 大阪大学大学院工学研究科構築工学専攻、土木工学専攻ならびに建築工学専攻、旧 地球総合工学専攻の地球保全総合工学領域および地域文化デザイン工学領域、地球 総合工学専攻社会基盤工学コースならびに建築工学コースの卒業生、学生
 - (3) (1) (2) に対し、教育および指導を行った旧教官、旧教員、現教員および役員会の 議決によって入会を認められた者とする。
- 第 6 条 この会の会員に次の 3 つの種別を設ける。
- (1) 正会員：卒業生、教員。
 - (2) 特別会員：名誉教授、元教官、非常勤講師、元非常勤講師および役員会の議決よって入会を認められた者。
 - (3) 学生会員：学部学生および上 1 号に該当しない大学院生。

役 員

- 第 7 条 この会に会長 1 名、副会長 1 名、幹事長 1 名、監事 2 名、委員若干名、幹事若干名の役 員を置く。
- 会長は本会を代表し会務を総括する。副会長は会長を補佐し職務を代行する。
- 幹事長は会長を補佐し幹事団を総理する。監事はこの会の会計を監査する。
- 委員は会務を評議する。幹事は会務を処理する。
- 第 8 条 会長および副会長は正会員の中より役員が推薦する。
- 幹事長は地球総合工学専攻社会基盤工学コースおよび建築工学コースの教授、准教授、 講師のうちから互選する。委員は各卒業年次から 2 名ずつ、各支部から 1 名ずつ互選する。
- 監事は委員のうちから互選する。幹事は地球総合工学専攻社会基盤工学コースおよび建 築工学コースの教員から選出する。
- 第 9 条 役員の任期は 1 年とする。ただし再任を妨げない。

附会会則

役員会・総会

- 第 10 条 役員会は会長、副会長、幹事長、委員および幹事によって構成され、年 1 回これを開く。但し、会長が必要と認めたときは隨時これを召集することができる。
- 第 11 条 会長は必要に応じて総会を開く。

会 計

- 第 12 条 この会の費用は会費および寄付金その他をあてる。会費の変更は役員会の議決によってこれを定める。
- 第 13 条 会費は 1 ケ年、正会員 3,000 円とする。ただし、他大学を含めた大学院在学中の正会員は半額とする。
また、卒業 45 周年を迎えた会員は、会費を滞納していない限り卒業 46 年目以降の会費を免除する。
- 第 14 条 この会の会計は監事が監査し、その承認をえて役員会でこれを報告する。

事 業

- 第 15 条 幹事団は次の各号の事業を行う。
- (1) 会員名簿の刊行と配布。
 - (2) 講演会、見学会などの開催。
 - (3) その他の行事。
- 第 16 条 会員が叙位、叙勲などの栄に浴した場合、会長より祝電を打つことができる。
- 第 17 条 会員が弔事の際は、次の各号による。
- (1) 正会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、檻または盛花一対を呈する。
 - (2) 特別会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、檻または盛花一対を呈することができる。
 - (3) 学生会員が逝去の場合は会長より弔電を打つことができる。

会則の変更

- 第 3 条 この会の会則の変更は役員会の議決によってこれを定め会員へ報告する。

付 則 この会則は平成 17 年 4 月 1 日より実施する。